
殺し屋同盟・解散組み

高比良 柚与

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋同盟・解散組み

【Nコード】

N3245C

【作者名】

高比良 柚与

【あらすじ】

H県F市に住む26歳の男、小丘允博は、殺し屋で同盟を作った、殺し屋同盟の一人。同盟の司令官(?)の闇藤から送られてくるメールで今日も彼らがボケツツコミしながらも悪人を影で葬って行く？

指令1：殺し屋同盟

H県F市。

廃工場の入り口付近。

そこで、男は一人で、佇んでいた。

「あのー？佇んでるところちょっと悪いんだけどさあ、お前、全然恰好ついてないから」

男の後ろでバイクに跨っている男は言う。

「だー、もうっせえなあ！自分が恰好いいとおもってたなら、恰好いいんだよ！！！」

振り向きながら男は言う。

今、振り向いた男の名前は、おおかのぶひろ小丘允博。

何故かは知らないが、恰好付けたがる変人。

26歳の男。

そして、独身。

ついでに職業は、殺し屋。

でも、殺し屋とは言っても、普通に夜中に出てばんばん人を殺すよ
うな、殺し屋なんかじゃない。

と言うか、殺し屋で同盟を組んでるって言った方が早いのだろう。

「なあ、やみどう闇藤さんからの指令まだ？」

允博はずいといと顔を近づけて言う。

「いや、顔近いから。ヘルメット当たてる……。って、痛い痛い痛い
いいてててててて、痛いっつってんじやん！ヘルメットでここにめ
り込んだじゃん！」

「何、問題ない。どうせそのうち、腹の贅肉が何とかしてくれんじ
やねえの？」

今、允博がヘルメットをでこにめりこませた奴が、允博の家の近所
に住む、さきはらこうすけ篠原厚輔。

メタボリック症候群なりかけの28歳の男そして允博と同じく、独

身。

「デメエ、俺のこの腹の肉を何て言ったあ？」

「贅肉」

允博が即答したのが悪かったのか、篠原はキレだした。

「デメエ、標的殺るまえにお前から殺ってやろうかあ!？」

「メタボさん、うるさい」

「黙れ腹割れ小僧!!!」

「なにソレ、羨ましがってんの!？」

篠原は煙草に火をつける。

「ケッお前なんかいなかったら……」

「あ、阿河さん」

篠原に付き合うのが怠くなってきたのか、允博は後ろにいた阿河あがわきよ叫うご悟に声を掛けた。

「ん？小丘。いたのか、どうした？」

「あのへなちよこバイクに乗ったメタボリックなりかけの変なオッサンが俺を殺すって言ってきました」

「じゃあ、今日の標的ぶっ殺したら、その後で篠原殺るから」

阿河は煙草の煙を吐きながら静かに言った。

「おい、メタボ！今の聞いたか？標的殺ったらお前殺すってさ」

「阿河さあん！ちよっと、それ冗談ですよねえ!？」

「俺がいつ冗談なんて言った？俺が殺すと言った以上、お前の死は絶対だ」

阿河は、“るろ剣”のセリフを棒読みで言った。

「阿河さん……。それ、古いですよ」

「古くない。今俺の中では、るろ剣ブームが絶頂期に達しているんだ」

随分と遅い絶頂期ですね、と允博は思った。

「ってか、闇藤さん、遅くないですか？指令出すの」

篠原の言うとおり、今日はいつもより遅い。

現在の時刻は、深夜の1時23分48秒を指していた。

普通なら、1時10分にはメールで指令が入っているはずなのだ。

「ま、急がなかったって、殺せばいいんだから」

允博がそう言ったあと、三人の携帯が鳴った。

指令2：篠原さんはメタボリック

廃工場に、三人のメール着信音が響く。

「おい、誰からメール取る？」

メタボリックの篠原厚輔ささはらこうすけは他の二人を見る。

「あれ、何してんの？メタボ。早くメール開けよ、鈍間のろま」

篠原は、いつも通り、じゃんけんをして負けた人がメールを開くという勝手に決めた【三人が】ルール通りにやろうと思っていたのだが、他の二人はさっさとメールを開いていた。

「ちよっと、おい！何二人してさっさとメール開いてんだよ。いつも通りに——……」

「おい、メタボ。そのケータイ棄てた方がいいぞ」

允博は篠原の持っている携帯を指差す。

「え、何で」

「お前、メール見なかったのか？阿呆だな。そのメール、送られてきて十秒以内にメール開いて削除しないと、添え付けされているウイルスにやられて個人情報、曝け出されるぞ。」

阿河はフンと笑って言う。

「ま、もう遅いけどな」

篠原は最早ツツコミを入れる気力もなかった。

「メタボのオッサン、早くしねえと、闇藤さんに首ちよんされるぞー」

「あっさり、クビになるって言うてくれ……」

「さあて、殺し屋同盟、行くぞ！篠原あ、阿河さん！」

1時24分19秒を過ぎて、殺し屋同盟の三人は今回の標的のいる目的地へ向かった。

何分か後……。

「さて、どうしたものか……」

「そうですね、これ、どうすればいいんですか？メタボさん」

「うるせえ！ってか允博お前、今日俺のことまだ篠原さんとメタボさんしか呼んでないよな！？」

篠原のトークみたいなのは放っておいて、三人は今、立ち止まっている。

何故かと言われたら、今三人の目の前にある家は、豪邸である。表札には“秋山”と彫られている。

「ってか、ここどうやって入るんですか？メタボ」

「知らん。俺に聞くな」

「おいおい、こりゃ無理だって。出来るの閻藤さんだけだぞ。どうすんだあ？メタボ」

「だから、知らねえって……。ってか、お前らなんで全部俺に訊くワケエ！？俺に訊いても何もでねえよ！」

篠原がまたキレだした。

「おい、篠！お前、うるせえんだよ！一日何回キレたら済むんだ！？」

「俺の堪忍袋の緒はもう、ぶっちぶちに切れてるよ！」

誰もそこまでは聞いていないだろ。と允博と阿河は思った。

「んで、どうします？先ずはジャックやハッカーとか普通の異名を持つ篠原さん、どうぞ、お先」

そう言っただけで篠原の背中を門まで押す。

「ええええええええ？俺、そんな普通の異名持ってねえし！」

「いいから早くしろよ、メタボ」

「メーターボ、メーターボ、メーターボ」

阿河はメタボコールを始める。

「メタボをバカにすんじゃないやねえええええええ」

篠原は振り向くなり、カン■ングの竹山みたいに言う。

「はい、さっさとする。ってかもう、俺ら見つかってんじゃない？メタボリックの所為で」

「そうだな、まず、今のところは引き上げよう。俺らが捕まると、闇藤さんが困る」

篠原は手を止める。

「何？帰るのか？」

「ああ、今回の事は闇藤さんに報告しとく。篠原、全部お前の所為だからな」

「俺の所為！？そんな証拠、どこに……」

允博はポケットからもう一つの携帯を取り出す。

「これ、全部録音してあるから」

「マジかよ！！！」

阿河はウザそうに篠原を見て言う。

「おい、静かにしろ、篠は……。メタボ」

「何で言い直すんだよ」

「今は退く。だが、昼の12時30分にまたここに来い」

允博は訊く。

「え、何？昼に乗り込むの？」

「ああ、そうだ。どっかの大バカなメタボリックの所為で手が出せなくなったんでな」

篠原は右の眉毛をぴくりと動かす。

「おい、それ、俺のことだろ！」

「じゃ、そうゆうことで」

そう言って阿河は去った。

「…………。さて、俺も帰ろう」

「今の沈黙何だ！！！」

允博は帰りがけに振り向いて篠原に言った。

「ああ、篠原さん。いちいちキレると、頭禿げるし、寿命短いくせにもっと縮みますよ。じゃ」

篠原は暫くの間、允博の小さくなって行く背中を見ていた。

「余計なお世話だよ!!!!」

指令3…秋山邸潜入編その1

今現在の時刻は、
昼の12時9分。

阿河との約束まで、あと21分32秒……

って思ってるうちに一分進んだから、あと20分。

允博はそんなことを思いながら、街中で貰った求人情報誌をばらばら捲る。

殺し屋同盟でも十分喰っていけるのだが、允博は殺し屋同盟を辞めようかと思っていた。

「あ、ヤベ。何か色々考えてたらあと15分じゃん！」

そう言いながら允博は黒い服に着替えた。

「おい、篠原さん。メタボリックギリギリの篠原さん。もう直ぐ時間ですよ」

隣の部屋のチャイムを押しながら篠原の名前を呼んだ。

「ちよつと、メタボ！新聞取れよ！！！」

いつもなら、「うるせえええ！聞こえとるわ、ぼけええええええ！！！」とか何とか言いながら出てくるはずなのだが、今日は返事が返ってこなかった。

「おいおい？何？俺らがメタボ、メタボ言うから気になっちゃって病院行ったか？それとも、人間ドッグ行ったか？」

何となく思ったことを口にしてみたが、やはり篠原は出てこなかった。

「仕方ねえ、行くか」

そう言って允博はエレベーターのボタンを押した。

丁度15分後……。

「おい、遅いぞ。遅刻だ。何分遅れたと思ってるんだ？」

「2分38秒くらい？」

阿河は秋山邸を見て溜息を吐く。

「正解だ。まあいい、今回は見逃してやる。だが、メタボの篠原はどうした？」

「玄関のドアをノックしながら愚痴を零しても出てきませんでした」「そうか……。ええ？ 出てこなかっただあ？」

いつも冷静な阿河が声を上げたので允博がびっくりした。

「それは、本当か！？」

允博は何度か頷く。

「そうか……。今日、闇藤さんから聞いた話だが、篠原が同盟から抜けたいとほざいたらしい」

「え、それホントですか……？」

「ってゆうか、ほざいたって……。」

「どうしますか？」

「どうするも、こうするも、連れ戻すまでだろ」

「…………。阿河さん、先ずは秋山章造を殺してから話し合ひましよう」

阿河は少し黙って允博の意見に賛成した。

「そうだな。先ずは、目の前にある標的が先だな」

そう言って革製の黒い手袋をきつく締めた。

「…………。行きますか」

「ああ」

そう言って二人は、秋山邸の門を潜った。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

「何イ？同盟から抜きたいだあ？」

暗闇の中で、一人の男の声上がる。

「バカか、お前は？この同盟は抜けられないと、最初に言っただろうが！」

殺し屋同盟の司令官、闇藤了やみどうりょうご後である。

「それに、抜きたい理由が、阿河と小丘にメタボだの、デブだの、言われた拳句の果てに、濡れ衣まできせられたからだあ？」

「は、はい……」

だが、あの二人は篠原のことはデブとは言っていない。

「すつ、すいません、闇藤さん……！！！」

篠原は暗闇の中にいる、闇藤に頭を下げた。

「…………。もういい。俺ははなっからお前の事なんか信用していないし、頼りになんかしていない」

「……………」

「仕方ないな…………。辞めたいと言うのなら、勝手に辞めればいい。しかしな、渡した金だけはちゃんと払い戻せよ。だから、お前同盟続行！！！！以上！！！！」

そう言って闇藤は篠原のケツを蹴った。

「いてててて、ってか、またでこ打ったし…………」

「早く行け、篠原あいつら、ちよつとばかしピンチらしい」

「…………ええええええええちよつと待って下さい！ピンチなのに、俺が行くんですかあ！？」

闇藤は暗闇の中でやりと笑った。

篠原はその暗闇の中できらりと怪しく光る金歯を見てしまった。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

秋山邸に潜り込んだ二人だったが、とんでもない事が起こっていた。

「おい、何故こうなっているに？」

「さーあ？」

二人は今、死体と化した秋山章造の目の前に立っていた。

指令4：秋山邸潜入編その2

小丘允博と、阿河叫悟の目の前に、今回の標的である、秋山章造の死体が、

あった。

允博と叫悟は目を合わす。

そして再び目の前の死体に目を落とした。

「え、何この状況？」

「一体全体、何があったってんだ？」

二人は秋山の死体を凝視した。

「それはさあ、この屋敷の誰かが殺しちゃったんじゃないかなあゝって、俺は思う」

いつの間に侵入していた篠原が二人の後に立っていた。

「ぎゃあ!？」

「ううわ!？」

二人は声を上げた。

「バツカ、テメェ何しに来たんだよ!」

「篠原、お前辞めたんじゃないのか？」

二人に攻められる篠原は、ぶつぶつと呟き始めた。

「何かさあ、俺、闇藤さんにさ、報酬として金もらってたじゃん？あの金さ、ほとんど自分の買いたい物買っちゃったりしててさ、今の持ちがね、万単位ないんだよ……。今月まだ始まったばっかなのにさ……」

メタボの篠原は計画性が全くなく、金の使い方なんてもう、ヤバイとにかく、ヤバイ。

「そういや……篠原さんって、同盟入る前に奥さんいたんだよね……?」

篠原はこくりと頷く。

こくりじゃなくて頭をぶんぶん音を立てて頷いたの方が正しいのだ

ろうか？

「しかも、離婚の理由が、やり繰り上手じゃなくて、金が競馬やら、パチンコやらで消えていったから別れたとか……………」

「ああ、そんなことあった気がする」

メタボリック症候群の次はアルツハイマーか？
と、允博は思った。

「ってかよお、今はそんなこと話してる場合じゃねえだろ」

「そうだったな。よし、允博、篠原、手伝え」

三人は秋山の死体をどうするか考えていた。

「ってかさ、何で俺ら本気で考えてんの？別に殺してなんかないじゃん」

「それもそうだな」

叫悟は允博の考えに反応する。

「そうだっけ？俺らが殺したんじゃないの？」
バカがいた。

バカの限度を超していると思うが。

「…………。とりあえずさ、闇藤さんに教えねえと…………」

「もう報告した」

「早あつ！！！」

允博は思いつき大きな声を上げた。

「…………。ってかさ、何で誰も来ないの？何かおかしくね？入る時だってそうだよ、警報機なんか一つもならなかったし」

「もしや…………、俺らの潜入の仕方が大胆すぎたとか…………？」

叫悟は真顔で言う。

「い、いや、そんなことないでしょう？そりゃ、あれは大胆すぎだとは思いましたけど……………」

「もしや！」

篠原が大きい声で叫んだので、二人は同時に篠原を睨んだ。

「あ、睨まないで、睨まないで。じゃあ、俺の考えを言う。もしかhしてさ、他の殺し屋が俺らより一足お先にちよいっと殺っちゃっ

たんじゃないのかっていうんだけ——ど——……」

篠原は二人の刺々しい視線にやっと気付いたらしく、身を縮めた。

「あ、はい。分かりましたないですよ、そんなのあははは……」

篠原が立ち上がった後、下に下がろうとしたその時、

「って！」

「くっ……！」

篠原が何かとぶつかって尻餅を付いた。

「いててててて……。って、このセリフ言うの今日で何回目だ？ってか、誰だあ！？この俺にぶつかったのはあ……！」

そう言いながら顔を上げた。

「威勢のいいセリフを吐いたのはいいが……。貴様等何者だ」

目の前に立っているのは、声色からして女だと思うのだが、恰好がもう、来る時代を間違えてしまったような、黒上から下まで黒い着物に身を包んだ人だった。

「ぎゃあああああああ……！！！！幽霊！幽霊！！！！りん！びよおお！とおお！しゃああ！かわいい！じいじいん！れえええつ……！！ざあああああ……！！！！ぜええええええん……！！悪霊退散……！！」

「篠原あ……？おい、よく見ろ、こいつちゃんと足あるぞお」

「いや、允博。今はそうゆう問題じゃない」

「あ、はい」

叫悟は目の前の人物を睨み上げる。

「お前、何者だ」

「俺の名は——……。いや、名乗るだけ無駄だろう」

そう言うと、身を翻してきた道に戻って行った。

「おい、待……」

「ああ、それと、そのメタボリック寸前の者。言いたい事が一つ出来た」

篠原さんは、「何だ」と少し低い声で言った。

「貴様、そんなに堪忍袋の緒を切っていると、頭。バーコードのようになっちゃいますぞ」

そう言って、静かに去って行った。

「…………メタ原さん、どんまい…………ぷぷ」

「だから、余計なお世話だって言ってんじゃん!!!!!!」

篠原の叫びは広い廊下に響いて虚しく消えた。「…………って言うかさ、あの人誰だったの？」

允博はぽつりと呟く。

「ああ!!!!やっべ、訊くの忘れてた!!!!」

篠原だけじゃなくて、皆バカだった。

指令5：秋山邸潜入編その3

「おい、どうすんだよ？あの変な侍野郎、どっかに行っちゃったぞ？」

篠原は腕組みをして言う。

「篠原さんのその腹がキモかったからじゃねえの？」

允博は訊く。

「なんで俺の腹の所為なの！？俺の腹、どんな罪があるの！？」

「見たものの脳髓を破壊する威力を……」

叫悟はぼそりと呟く。

「いや、それもう人間じゃねえって。機械だよ！ロボットだって！」

ツッコむ篠原に允博は言う。

「おい、メタ」

「随分略されたな、おい……。言うならちゃんと見え」

「じゃあ、メタボリック症候群野郎」

叫悟が呟いた後、篠原は壁に凭れ掛って絶望した人のようになっていた。

「おい、その人。今ショック受けてる場合じゃねえんだよ。さっさとしねえと、闇藤さんに――……」

「クビが何だ。俺は元々、コッチの仕事をやりたくて入ったわけじゃねえんだよ！行くならお前ら二人で行け」

篠原は煙草に火を付ける。

「……。行こう、小丘。コイツはあとでブチのめす。神の元へ召してやる」

「……」

そう言って允博と叫悟はさっきの男か女がよく分からない人が引き返した通路を小走りで渡った。

篠原は一人、その場へ残された。

「……………。え、マジで行っちゃったの？ええー…………」

篠原は煙草の火を壁に擦り付けて消した。

「うそお……。俺、一人嫌いなんだよね……………」

そう呟いたとき、背後で足音が微かに聞こえた。

「……………。允博か？それとも、叫悟……………か？」

足音は次第に大きくなる。

コツコツと音を立てて。

「よお、負け犬の醜態曝して面白いなあ……………」

足音の持ち主は口の端を吊り上げて言う。

「あ、アンタは」

XXXXXXXXXXXX

「なあ、あの変な奴、どこに行ったんでしょうね？」

允博は通路を歩きながら前を歩く叫悟に訊く。

「知らん」

叫悟はさっきから同じ返事を呟くだけ。

叫悟があまり喋らない奴なのは、変わらない。

「……………。篠原さん、どうなったんでしょうね？」

「……………逃げたんじゃねえのか？」

「…………」

そこで会話は途絶えた。

XXXXXXXXXXXX

「アンタは、闇藤さん!？」

出てきた回数が二回しかないのに、闇に隠れた人が早くも出てきた。

「おいおい、司令官に向かって「アンタ」はねえだろお？」

闇藤は黒の背広のポケットから煙草を出した。

「おい、火イくれ」

闇藤は手を篠原に差し出す。

「あ、ああ……はい」

かちりと言う音と共に煙草に火が灯る。

「……あの、何で闇藤さんがここに？」

「ああ?……何でってほら、アレだよ、アレ」

闇藤は言葉を選んでるようだった。

「あの、闇藤さん……?言葉選ぶようだったらあらかじめ考えて出てきてくださいよ。俺らの司令官もバカって思われちゃうじゃないですか」

「勝手にイメージを定着させるんじゃないやねえ。俺はバカだ。リピートアフタミー?はい、バ」

「闇藤さん、アンタここに何しに来たんだよ」

闇藤は「あ」と口を開けると煙草の灰をポケット灰皿に落とした。

「俺がここに来たのは、ちょっとくら野暮用があつてきた」

「野暮用?野暮用って、どんな用ですか？」

「お前なんぞには言わん。おい、金庫室はどこだ？」

闇藤はにやりと笑うと、煙草を灰皿に押し付けて火を消した。

指令6：秋山邸潜入編その4

闇藤はにやりと怪しい笑みを浮かべていた。

「篠原、金庫室、どこか知ってるか？」

「え、まさか闇藤さん、アンタ俺らに渡してた金ってもしや……」

「そうだ、死んだ俺の目の上たんこぶ……じゃなくて、悪党共の金を渡していたが、何か問題あるのか？」

「問題ありありじゃん！」

篠原は司令官である闇藤にタメ口でツツコんだ。

「さ、金庫室はどこだ？ 篠原」

闇藤は笑顔と言えない笑顔で篠原に訊いた。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

その頃の二人……。

階段を降りていた。

「阿河さん……？」

「……」

叫悟は何も言わない。

「阿河さん！？ 聞こえてる！？」

「……」

再び二人に沈黙が訪れる。

「ちよっと、阿河さん！ いい加減口聞いてくださいよ！ 俺、何か耳痛くなってきましたよ！？」

「だから、何だよ」

叫悟は振り向いて言う。

「おお、喋った」

叫悟が久し振りに喋ったので允博は少々、ビビっていた。

「……………何ビビってんだ？」

「あ、いや阿河さんが久々に喋ったから」

允博がそう言うのと叫悟はまた前を向いて階段を降りる。

「阿河さん、あの変な人、どう思いますか？」

「メタボリックか？」

叫悟が真剣な声で聞いてきたので允博は勢い余って吹きだした。

「ち、違いますよ、アツハハハ！まあ、確かに篠原さんは変な人ですけど、あの侍みたいな奴ですよ」

叫悟は「ああ、例の」と呟く。

「アイツ、何なんですかね？他の殺し屋ですか？」

「いや、俺に訊いてどうする。俺、何も知らねえぞ」

允博は「ふーん……」と興味無さ気に呟く。

「ええ！？ちょっと、そりゃ無いでしょ！？阿河さん！」

「な、何がだよ。ってか、そんなにバカでかい声出すな！奴等に見つか——」

「お話中のところ済みませんが、もうバレバレですよ？」

叫悟の後で、誰かが言った。

「あ、お前——」

叫悟の後には、さっきの時代を間違えたような人が立っていた。

「あ！時代はずれ！」

「いや、允博、こういう時は思い切って『時代遅れ』と言うべきだ」

「おお、成る程」

允博は手を打つ。

「貴様等……、久々に喋ったかと思ったら話しの内容はそれか……！」

侍の恰好をした（以下略）は肩を震わせていた。

「もういい、着いて来い」

そういつて早足で階段を降りていった。

XXXXXXXXXXXX

「あ、ここだ。闇藤さん、多分ここです」

篠原は一つの部屋を指差して言う。

「ああ、ご苦労」

そう言つて闇藤は部屋の鍵穴に針金のような物をつっ込む。

「じゃ」

闇藤は部屋のドアノブを捻ると電気の付いていない部屋に入った。ドアが閉まると、篠原は一人ポツンと通路に突っ立っていた。

「あれえ、また一人になっちゃったよ。おいおい、悲しいねえ俺」
篠原は独り言をぼやく。

「おい、篠原。ちよつと手伝え」

闇藤がドアから手だけを出して手招きをしていた。

「……闇藤さん、古典的なホラー映画のワンシーンみたいですよ……」

「いいから来い」

篠原は闇藤のいる部屋に入った。

「見ろ、篠原」

闇藤に言われて、篠原は視線を闇藤にやる。

「どうかしましたか？ 闇藤さん」

闇藤は黒い箱のような物の前に立っていた。

「そ、それって……」

「なに驚いてんだ？ 見ての通り金庫だ」

驚いている篠原を他所に、闇藤はポケットから何かを取り出した。

指令7：潜入編その5

「おい、どこ行くんだ？俺ら」

允博は先頭を歩く侍の恰好をした（以下略）人に訊いた。

「何だ、落ち着きの無い奴め……。さっきから何回目だ？着けば解かると何回も言っているだろうが」

「おい、お前。允博はああゆう性格してるから何度言っても無駄に等しいぞ」

叫悟は怠そうに言う。

「あ、阿河さん……。？何でそんな奴に俺の事話ちゃってんの？ってか、何で俺の性格知ってるの」

「おいおい、俺らは二日や三日の付き合いか？そりゃ、何年も何年も行動を共にしてりゃ分かるに決まってるんだろ」

（殺し屋同盟は約1年前に結成されたんですけど……）

允博はそう思った。

「つつーかさあ、何で俺ら見ず知らずの人に着いてってんの？」

「さあ？」

允博の前を歩く叫悟は首を僅かに動かす。

「ってか、ここどこだよ」

「さあ？」

允博と叫悟と侍の恰好をした（以下略）は、地下のようなところ歩いている。

「地下？」

「さあ？」

先ほどと同じ動作を叫悟はする。

「いや、阿河さんには訊いてないですよ」

「……」

「侍の人、アンタだよ」

先頭の侍の恰好をした（以下略）は僅かに首を動かす。

「ん…………。あ、俺か」

「アンタ以外に誰がいるんだよ、侍はあ……」
半ば呆れて允博は言う。

「いや、見ての通り、地下であろうが。貴様、そんなことも解からぬのか？ダサ……」

「おおい、今思いつきり現代語使ったよな？使ったよな？」

先頭から数メートル離れていても允博は最期の呟きを聞き逃さなかった。

「ところで、お前は何でこんな地下への道を知ってるんだ、答えろ」
叫悟は睨むような目付きで言う。

「…………貴様等は何故だと思う？」

「篠原さんの変な意見を使わせてもらいます。お前、もしくはお前等。どっかの殺し屋か？」

侍の恰好をした（以下略）は、足を止める。

「…………。何故、そう思う？」

「さあ？それともお前、使用人か？」

「流石にそれは有得ないんじゃないかねえのか？」

「…………」

暫くの間、三人は足を止めてそこに佇んでいた。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

「うつわあ…………。すんげえ古典的な奴なんですネ、秋山章造って奴」

篠原の言葉を聞いて闇藤はクククと小さく笑う。

「古典的な奴なんじゃねえよ。ただ単に考える事が古いだけさ。この屋敷の中、使用人みてえな野郎は通ったか？」

「いいえ。あ、何か侍の恰好した男か女がよく分からん奴なら通りました」

闇藤はまたクククと笑う。

「まあいい。篠原、金を盗るぞ。その鞆取れ」

そう言って闇藤はドアの近くに置かれたアタツシケースのような鞆を指差す。

「あ、はい……。ってか、この鞆、ヤクの販売人みたいですよ、闇藤さん」

「気にすんな。サツが来たらそれまでだ。今回の報酬、無くなるかもな」

その言葉に篠原はガクリと頭を落とした。

「ま、バレねえ程度に殺しときゃなんとかなんじゃねえのか？」

「……。闇藤さん、世の中そんな甘くないですよ」

「んなモン、ハナっから知ってらあ」

そう言った後、闇藤は白いハンカチを取り出す。

「ん？何するんですか？」

「何って、開けるに決まってるんだろ」

闇藤はダイヤルをカチカチと音を立てながら言う。

「……。数字、分かるんですか？」

「おいおい、俺をバカにするのは百億万年以上早いぞ。俺の情報網をバカにすんな」

「はあ……。ってか、そう言うのどうやって手にいれてるんですか？」

闇藤は一つの黒い扉を開ける。

「そりゃ、ハッカーに頼むか、何かすりゃ簡単に手に入るさ」

ハッカーとかで済ませているようには聞こえない言い方だった。

「……。闇藤さん、もしや誰か脅して何かやってるワケじゃないですよね？」

「……さあな」

そう言って闇藤はにやりと笑った。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

「仕方ないな、少しだけなら答えてやろう。俺はここの使用人なんかじゃねえ」

「じゃ、元使用人か？」

允博は真顔で訊き返す。

「俺が元使用人ならば、何故こんなところにいるのだ？」

「果たせなかった未練を晴らす為に……………」

「…………。允博、バカ言ってるねえで次」

允博は「え。俺？」と言う顔をする。

「…………じゃあ、アンタはどっかの殺し屋か？」

「ああ、貴様の言う通り、どっかの殺し屋だ」

「…………」

「仕方ない、俺が訊く」

そう言って叫悟は允博を自分の後に回す。

「先に訊くべき事を言う。お前の名前は何か？」

「…………呼び名は蜻蛉^{かげろう}だ」

「カゲロウ？とんぼの方か？」

叫悟は訊く。

「ほかの奴等からはそう呼ばれている。とんぼの方だ」

「で、お前はどこの回し者だ？」

蜻蛉はフツと笑う。

「闇藤…………と言う奴を知っているか？」

蜻蛉は二人を見据えて言った。

指令 8 .. 潜入編その6

「は？ 閻藤？」

「おい、何故お前の口から閻藤の名前が出る」

蜻蛉は小さく笑う。

「さあ？ 何でだろうねえ」

蜻蛉は面白がっているような口調で言う。

[illegible]

「さてと、盗るだけ盗ったから、後は移動するだけだな」
篠原と闇藤のいる部屋には、合計四つのアタッシュケースが並べられていた。

「二つ持つからあとの二つ、お前が持つて」

「あ、はい。　　ってか、**闇藤さん**、どこに行くんですか？」

闇藤は笑顔と言えない笑顔を作る。

「着いて来れば分かるさ」

と言って、クククと笑った。

[illegible]

「何て、嘘に決まっておろうが」

蜻蛉は薄つすらと笑みを浮かべて言う。

「は？」

叫悟と允博は表し抜けした声を上げる。

「嘘つつつてんだろ。ついでに、貴様等が闇藤の回し者であることが分かったしな」

「あ…………。ヤッベ」

叫悟は口を押さえる。

蜻蛉は笑って言う。

「貴様等、そろそろ殺し屋辞めた方が良いぞ」

「ああん？」

叫悟は睨む。

「おい、お前……自分が何言ってるのか分かって言ってるのか？」

「解かっている。だからこう言っているのだ」

允博は溜息を吐く。

「なあなあ、お前がどこの殺し屋か知らねえけどよ、何言ってるんだ？ 殺し屋を辞めろって？」

「そうだ、辞めろと言っているのだ」

蜻蛉は見下したような言い方をする。

「むーり、無理。殺し屋ってのはさあ、そう簡単に辞められるもんじゃねえぜ」

「何だと？ 簡単ではないか」

「簡単なんかじゃねえよ」

後から誰かが言った。

「あり、この声って…………」

「え・うっそお」

叫悟は普段口にしらない言葉を使った。

「や、闇藤さん！？」

叫悟と允博の後には、アタッシュケースを両手に、闇藤が立っていた。

あと、息を切らしている篠原も。

「あれ？ 何で篠原さんが？ ってか、何で闇藤さんが…………？」

闇藤は允博の横まで歩いていくと、ニツと笑った。

「……………」

その笑顔は、どんな怖い奴等でも震え上がりそうな笑顔だった。

「……………篠、原？そこにいるよな……………」

「ああ？居るに決まってるだろ」

そう言いながら篠原は允博の方へ歩いていく。

「なあ、あの人……………。ある意味怖いな」

「…………お前、今更気付いたのか？あの笑みは凄いやばいぜ、凶器通り越して、鈍器だ」

篠原は笑いながらそう言う。

「いや、鈍器通り越して凶器じゃねえの？」

「知らん」

「……………」

叫悟は二人を遠目で見ていた。

「…………。バカか、あついらは？」

気付けば闇藤が隣に居たので叫悟は慌てて右を見る。

「や、闇藤さん」

「何でこんなところについて言いたそうな顔してんな。何、大した用事じゃねえよ」

「い、いや、大した用事じゃなかったらここにいないんじゃない……………」

「おい、お前」

叫悟を無視して闇藤は蜻蛉に向かって言う。

「こいつら連れてどこ行く気だあ？ああ？」

「さあ、何処だろうな」

「おい、惚けんじゃない。はっきり言いな」

そう言いながら闇藤はどこからか、銃を出した。

「じゃねえと、撃つぞ」

その後ろで、允博はこう呟いた。

「なあ、俺等意味無くない？標的殺されて、最後を締めようとしてたら闇藤さん出てきて、しかも今、その闇藤さんが銃なんか向けち

やってるし」

「あれ？何かあの銃、アレに似てね？」

「あー、ホントだー……何かデザートイーグルみたいだなー……」
二人に沈黙が訪れる。

「デザートイーグル————！！！！……？」

二人は同時に叫ぶ。

「デ、デデデデ、デザートイーグルってアレだよな、ほら、えー
っと」

「おおおおお、落ち着け、允博落ち着け」

叫悟は二人を黙って見ていた。

「おい、お前等なんでそんなにビビッてんだ？デザートイーグルく
らいで」

「あ、はい。すみません」

允博は元に戻ったが、篠原は少々ビビッていた。

「ふん、そんなモノ、相手なんかではない」

「おいおい、デザートイーグル目の前にして余裕こいた顔してんじ
やねえよ。本当は焦ってんだろ？」

「……」

「これ、引き金引きゃあ、分かるよな？」

そう言って闇藤は引き金に人差し指を掛ける。

「眉間打っても、撃たなくてもお前、一発だぜ」

引き金を引いた。

引いたと共に、轟音が地下全体に響いて木霊する。

「……………さ、篠原さん！？アンタ、どしたんだよ！？」

「し、死ぬ……」

篠原は倒れたまま動かなくなった。

「おいおいおい、何コレ、何コイツ。バツカじゃねーの？」

允博は人差し指で篠原をツンツンと突っついていた。

「おい、お前等帰るぞ」

「へ！？」

允博と叫悟は闇藤を見る。

「え、何で」

「ホレ、アイツもう動かねえぞ」

闇藤は蜻蛉のいた所を指差す。

「あ、ホントだ。コイツ動かねえ」

允博は一目見て言う。

「標的の秋山章造はコイツに殺やれた。だからコイツを打った。それで終り。これでいいだろ」

「何か、呆氣ないって言うか、投げやりって言うか……」

闇藤は三人より先に地下を出る階段に向かった。

叫悟は篠原を支えながら允博の前を覚束ない足取りで進む。

允博は、何かを覚悟したように、先を歩く闇藤に向かった。

「闇藤さん」

「何だ？ 允博、どうした？ 終わり方が不満だったか？」

「……。いえ、そうじゃないです」

允博は言い辛いような顔をする。

「何だ？」

「俺……、同盟辞めます」

允博は覚悟したように闇藤に言った。

指令9…解散組み

「俺、同盟辞めます」

允博は覚悟したように闇藤に言った。

「な、何だと……」

先に反応を示したのは叫悟だった。

「何言ってるんだ、允博。お前、正気か？」

叫悟は篠原を地面に横たわらせて允博に近づく。

「おい、何とか言え！」

叫悟は允博の胸倉を掴む。

「……。そりゃ、殺し屋やっても十分、食っていけるさ。でもさ、この仕事してて、たまに思うんだよ。俺、普通に戻るのか？ って」
允博の胸倉を掴んでいた叫悟の手は滑るようになって離れた。

「そうかよ。お前がそう言うんだったら俺だって辞めてやるさ」

「え」

叫悟の発言に闇藤は不安そうな顔をする。

「殺し屋同盟は今日、ここで終りだ！ 解散だ！！！」

「ちょ、おいおいおいおいおい！ 俺忘れてね？ なあなあ、肝心の俺忘れてね！？」

「闇藤さん」

允博が改まった態度で闇藤に接する。

「約一年間、どうも有難う御座いました」

「お、おおう。………じゃなくてさ！ お前等、本当に辞める気か！？」

允博と叫悟は突き刺さるような刺々しい視線で闇藤を見る。

「はい、辞める気です」

允博と叫悟の声がハモる。

「ええええええ……。ちょっと待てよ、お前等！」

闇藤は二人に言う。

「お前等、俺の許可なしに解散できると思うなよ!!!」

二人は闇藤に背を向けたまま動かなくなった。

「お前等が殺ってきた人数は一ヶ月に約十人！殺し屋ってのはそう簡単に辞められるようなモンじゃねえぞ！殺しに使う為の技巧テクニクはそう簡単に忘れられるようなモンなんかじゃねえ。忘れられたとしても、いつ思い出すか知れない。そんなんで普通の日常過ごせるとでも思うなよ!!!」

闇藤は息を吸う。

「お前等にとって、普通の日常とは何かよく知らんが、殺し屋は簡単に辞められねえからな」

「……。辞める事なんか、簡単じゃないですか」

允博は呟く。

「ああ？」

「簡単ですよ。闇藤さん、携帯出してください」

允博にそう言われて闇藤はポケットを探る。

「ホレ」

そう言って允博に手渡す。

「俺のメアドや俺のデータ、全てを消せば簡単ですよ」

允博は自分のアドレス、電話番号、自分に関するデータを消していた。

「おおおおおい！ちよつと待て待て待て待てエ!!!消すなよ!!!」

「俺のデータよ、無に帰れ」

「全然恰好良くないって！ってか、何そのセリフ!？」

闇藤は携帯をポケットに入れる。

「これでアンタからの指令は入らなくなった。これで俺はバイトに明け暮れる毎日を過ごせる」

「何、その嬉しそうな顔!？」

「いや、俺は毎日毎日バイトに明け暮れる日々を毎晩夢見ていたんだ」

「どんな夢だよ」

闇藤はツッコむ。

「闇藤さん」

允博の次は叫悟が闇藤に言う。

「何だ！お前のデータは消させんぞ！」

「いえ、そうじゃなくて……。俺のデータ」は残していてもいいんですが、メール、又は電話は絶対にしてこないでください」

「ええ？」

叫悟は目を合わさずに言う。

「俺は知人が少ないんで、闇藤さんは、ただの知り合いってことにしておきたいんです」

「メールとか電話したらいけねえ知人なんかこっちから願い下げするっつーの！」

「あ、メールとか電話してきたら、こちらから殺しに行きます」

叫悟は殺気の籠った笑顔で言う。

「んな殺気出しながら言うな。データ消したくなるだろ」

允博は二人の会話に首を突っ込む。

「おいおい、阿河さん。友達少ないんなら俺に言ってくださいよ。

俺が友達になります」

「お前みたいな知人、いらんわ！散れ！」

叫悟は凄く嫌そうな顔をして言う。

「俺は灰とかじゃないんで、散る事は出来ませんよ！」

「んなもん、ハナっから知ってらあ！」

二人が小学生のような口喧嘩をしている間に、篠原は目を覚ました。

「起きたか。おい篠原。あいつら、同盟抜けるらしいぜ」

闇藤は篠原の頭の近くにしゃがみ込んで言う。

「え、ええ！？うそう……」

篠原は上半身だけを起こしながら言う。

「そうですか」

「で、お前はどうするんだ？」

「同盟のことですか？」

闇藤は「ああ」と呟く。

「どうすればいいんでしょうね」

「それはお前の決める事だろうが。自分で決めたことは貫き通せとか言うけどよ、それは随分無理な事だと俺は思う」

「そうですね……。ってか、何でこんなにしみじみした雰囲気になってるんですか！？これ、もしや終り！？最終回！？ってか、俺何の役にも立ってないじゃん！」

闇藤は「さーあ」と呟く。

「知らねえよ。お前が役に立つ役柄じゃないのは登場してきてからだと思うがな」

闇藤は「ハッハッハッハッハ」と笑う。

そして闇藤は未だに口喧嘩のようなことをしている二人に近づく。

「はい、お前等そこまで」

「あああ？」

「ふざけてんのか？ テメエ」

二人は背後に蛇の絵が出てきそうな勢いで闇藤を睨んだ。

「睨むな、睨むな。二人とも、低レベルな喧嘩はそこまでにしろ。んで、話を戻すが、お前等三人は同盟を抜きたいんだよね？」

「当たり前じゃあ！」

「んな同盟抜けてやらあ！」

「闇藤さん、この二人、誰……？」

闇藤は手を叩く。

「落ち着け、三人共落ち着け。でー、篠原から聞いたと思うが、お前等は俺が報酬としてやった金を全部払わねえと、抜けることは出来なと言った。今のお前等にあれだけの金はあるか？」

「無いですよ、全部生活費と必要なモン買う為に使いましたー」

「俺も同意」

「あ、俺も」

允博の意見に二人は同意した。

「篠原、嘔吐くな。叫悟、お前に必要な物なんてあるのか？で、話を戻す。お前等にやった金は億以上なので、お前等はあと約一年間、殺し屋として俺の元で働け。いいな？」

三人は口で「ブーブー」と言っていた。

「お前等ってよくよく考えたら、幼稚だよな」

允博は手を上げる。

「闇藤さん、俺等解散する人同士が集まってる同盟にいるんですよ？」

「…………。本当は同盟じゃなくて殺し屋のグループだけだな」
その言葉に允博はニツと笑う。

「じゃあ、俺等は、殺し屋同盟・解散組みてワケだ？」

「だから、なんで殺し屋同盟なんだよ。同盟要らねえだろ」

「よーしっ俺等あと約一年間、殺し屋として働こう。それでいいよなあ？二人共」

允博は二人を正面から見る。

「ああ、別に俺は構わん」

「俺も」

「じゃ、頑張ろう。殺し屋同盟・解散組みとして」

闇藤は三人を置いて一人、先に地下を出た。

「殺し屋同盟・解散組みねえ…………」

そう言ってクククと笑った。

指令10：阿河叫悟

「あれ？闇藤さんは？」

三人は地下の中を見回す。

さっきまで闇藤のいた所には、三つのアタッシュケースが置かれて
いるだけだった。

「行っちゃった？」

「行ったんじゃない？」

叫悟は允博の質問に答える。

「おい、メタ原。行くぞ」

「なんか出てきたぞ、おい。今『メタ原』とか聞こえたのは気の所
為か？」

允博は笑いながら「気の所為、気の所為」と言っていた。

篠原は階段を上る前に、倒れている蜻蛉を見た。

「……」

「おい、メタ。何してんだよ、早くしねえと置いてくぞ」

上から允博が待っていたので篠原は階段を早足で上った。

「何してたんだ？」

「いいや、何でも」

二人は先に行った叫悟を追いかけた。

「阿河さ……」

「遅い。お前等何してたんだ」

允博は篠原をチラッと見ると叫悟の方を向く。

「篠原さんが『待って！お願いだから待って！』って泣き言を言っ
て来たんで仕方なく待っていました」

「いや、それ濡れ衣だって！おい！！！」

「まあいい。今日はこれにて解散。じゃあな」

叫悟はそう言って秋山邸の門を出て右に曲った。

「……。俺、実を言えば、阿河さん嫌いだ」

「俺も嫌いだよ」

「何っつーかさあ、リーダー気取りってゆうの？」

允博と篠原は家が隣なので秋山邸を出て左に曲る道を歩いていた。

「闇藤さんのお気に入りらしいし」

二人の間に沈黙が訪れる。

「……………」

「……………」

「……………」

「俺、」

先に口を開いたのは允博だった。

「阿河あいつより早く同盟抜けてやる」

篠原は笑い出す。

「ぎゃっははははははははははは！」

「おい、黙れ！怪しい人に見えるだろうが！！！」

「ひ……………。お前が阿河さんより早くに抜ける？無理無理」

允博は篠原の頭を叩く。

「いってえ！」

「何で無理なんだよ」

「何でって、お前阿河さんがどこの人か知らねえのか？」

允博は「知るか」と呟く。

「あの人、阿河グループの跡取りだったらしいぜ」

「へ……………。阿河グループの跡取りねえ……………。跡取りイ！？」

「反応遅ッ！！ってか、だったつつってんじゃん！人の話をよく

聞け、お前は！」

允博は訊く。

「何で過去形？ってか、何で阿河のお坊ちゃまがこんな殺し屋に？」

「さーあ、そこまでは知らねえよ」

「何でお前がそんなこと知ってんだよ」

允博は篠原を見る。

「今日、闇藤さんから聞いた」

「や……。どうしてだ？」

「……………」

篠原は黙る。

「おいおい、まさか次潰すところが阿河さんのトコじゃないよな？」

「阿河さんのトコらしい」

允博は足を止める。

「何でだ？」

「闇藤さんが言うには、阿河の奴等、何かヤバい方に走って行ってるらしい」

「…………。おい、俺等が動くの、あと何日後だ？」

篠原は記憶を辿っているらしく、黙り込んだ。

「おい、早くしろよ！このメタボリック症候群！！！」

允博は地団駄を踏みながら言う。

「うるせえ！お前はちよつと黙ってるよ！この、腹割れ小僧！」

「んだとお！？んの、言い出しっぺ！」

「何の！？」

「抜けるって言い出したの篠原さんじゃんか」

篠原はチツと舌打つ。

「何故そこで舌打？」

「俺じゃなくてお前が先に抜けるって言ってたら言い出しっぺはお前になるから」

「そう言うことかい。で？思い出したか？」

篠原は、ハツとする。

「おいおいおい、お前の所為で思い出せなくなっちゃったじゃねーか！」

篠原は允博に怒鳴り気味で言う。

「まあまあまあ、そうカッコしなさんな。髪の毛抜くぞ」

「カッコさせてんのはどこのどいつだ！？ってか、抜くな。抜かれたら俺の魂の一部が抜けちゃう」

「抜かれたくなかったら早く思い出すことだな」

允博は条件付きの口約束をする。

「ええとだな、確か———確か———……」

「確かあ？」

焦らすような言い方をする允博。

「確か三日後ぐらいだ！」

「三日ねえ……」

そう言うのと允博は髪の毛を五本くらい、ぶちりと抜いた。

「ぎゃあああああああああああああああ！！！！俺の髪いいいいいいいい！！？」

允博は「悪イ悪イ」と軽く謝ってどこかへ走って行った。

「あと。三日」

そう呟きながら。

指令11…闇藤の考え

篠原は小さくなっていく允博の背中を見ていた。

走って追いかけようと思ったのだが、自分の体力を考えると、絶対に追いつかないと思ったからである。

「允博の野郎、何する気だ？」

篠原は頭を掻きながら呟いた。

「うわ、やっべ！髪また抜けた！！！」

士士士士士士士士

允博は走っていた。

闇藤が自分の住処として扱っている、街から外れたところにあるビルに向かっていた。

「……闇藤さん…、俺はアンタが考えていることがよく分かんねえ……」

人にぶつかりながら、允博は走った。

「俺は、アンタの思考回路がどうなってるのか知らねえ…」

允博は踏み切りで止まった。

電車はガタゴトと音を立てて走り去る。

遮断機があがる前に允博は踏み切りを渡る。

「俺はアンタの考える事が、阿河さんと同じくらい嫌いだ」
街の外れまで允博は来ていた。

げぼげぼと咳き込みながら呼吸を整える。

日はもう傾きかけている。

「……さあて、ここまで来たんだ。いっちょ、交渉人っぽく行くな」

允博は早歩きでビルの入り口まで行った。

土土土土土土土土

阿河邸

「お帰りなさいませ叫悟様。今日はどちらに？」

家のドアを開けると、叫悟の執事と使用人が出迎えた。

「……どこだっていいだろ。俺の勝手だ」

「しかし……」

叫悟は執事を睨む。

「俺は機嫌が悪いんだ。話し掛けるんじゃない」

叫悟は今、機嫌が悪かった。

途中参加の閻藤に蜻蛉を殺られてしまったことと、允博が指揮をとった事に。

それだけの事で、叫悟は機嫌が悪くなる。

「……………あの野郎……」

叫悟はアタッシュケースをブチ蹴る。

「絶対殺す……………！必ず俺の手で殺してやる……………！」

アタッシュケースが開いて、中に入っていた金が床に広がった。

士士士士士士士士

「無理だな」

椅子座っている闇藤は椅子をくるくると回転させながら言った。

「どうしても無理なんですか？」

允博は言う。

「無理だ。お前、言っただろ？ “俺の決定は絶対だつてな”」

「……………そうですか。残念だなあー、闇藤さんの好きなワンオクのライヴチケット手に入れたから闇藤さんにあげようと思ったんですけどねーえ…………」

允博はチケットを出して闇藤を見る。

「……………おい、允博。俺がそんなモノに釣られるとも思ってるのか？」

「……………。間違いなく俺の目には凄く釣られていると見えますが」

闇藤は『欲しい、くれ！俺に今すぐくれ！』と言いたげ気な目で穴が開くほどチケットを見ていた。

「……………悪いが変更も出来ない。それに、止めることだってできない」

「……………。なら、せめて阿河さんだけでも抜いてください」

「……………。仕方ない、やれるだけ手は尽くしてみる。それでいいな？」

允博は「はい」と答える。

「それと、允博……………」

「はい？」

闇藤は手を差し出す。

「何ですか？この手は？」

「ワンオクのライヴチケットくれ」

「俺が来週行ってきます」

闇藤はがつくりと頭を落とした。

指令12..闇藤の考え その2

「叫悟様、お電話です」

叫悟の部屋のドアの向こう側から執事の声がした。

「後にしてくれ」

「それが、急ぎの用だと……」

叫悟は仕方なく椅子から立ち上がってドアを開けた。

「誰だって？」

「もしもし？」

叫悟は受話器を執事から奪い取ると直ぐに部屋へと向かった。

『何だ何だ？ 機嫌悪そうだな。アツハハハハ』

闇藤だった。

「何の用だ？」

『ああ、そうそう。次の仕事のことなんだが——……』

闇藤は黙る。

「何だ？ 早く言ってくれ」

『次の仕事、お前は外す』

「な、何でだ！」

叫悟は電話越しで声を上げる。

「何だ？ 允博か？ それとも篠原か？」

『……俺が決めた』

「何勝手な事を！」

『じゃあな』

闇藤はそれだけ言って電話を切った。

「……………何なんだ、一体」

士士士士士士士士

「これで良かったのか？」

闇藤は目の前にいる允博に訊く。

「ええ、完璧です。セリフだけはね」

さっき闇藤の言ったセリフは全て、允博がカンペを出して闇藤に言わせていたのであった。

「さて、行動を起こすのはいつかだよな」

「はい、それが問題ですよ」

「どうすっかなあ……」

允博はチケットを出す。

「これはもう、ワンオクのチケットを使って……」

「いや、それは俺のだ！俺のなんだ！」

闇藤はチケットを允博の手から奪い取る。

「そんなに乱暴に扱ったら破れますよ？」

「大丈夫だって。破れたらまたお前に買ってきてもらうさ」

「ソウルドアウトしてたらどうすんですか？」

「そんなとき……S O U L・d O U Tのライブチケットを……」

允博はチケットを取り上げる。

「ああああ、悪かった悪かった。売り切れのソウルドアウトとアーティストのS O U L・d O U Tを掛けて悪かった！」

「ところで闇藤さん、日にちの事、考えてますか？」

「あ、忘れてた」

「……俺がライブ行って来ます」

「あ——！！！！待って待って！考えてる！考えた！」

闇藤は適当に言葉を言っていたら「考えた」と言ってしまったのに

気が付いた。

「本当ですか？言い逃れでしたら肋骨折りますよ？」

「動くのは四日後。あとの三日まで、俺が何とかするから、お前は
どうするか考えてろ」

「……はい。……ってか、闇藤さん」

「何だ？」

闇藤は顔を上げる。

「四日後にはちゃんと阿河の人いるんですか？」

「知らん」

闇藤は笑顔で答える。

「破りますよ？」

允博はチケットの端を僅かに破る。

「ちゃんと下調べはしといてくださいよ。こっちが困るんですから」

「………。允博」

闇藤は少し深刻そうな声で允博の名前を呼ぶ。

「何ですか？」

「お前——……、叫悟に殺したってこと、自分の口で言えるか？」

「……………」

「俺は何もしないからな」

允博はフツと笑う。

「大丈夫ですよ。全部篠原さんに任せますから」

「あ、そうか……」

允博の笑みがあまりにもブラックだった為、闇藤は納得してしまっ
た。

士士士士士士士士士

允博と闇藤が篠原の話をしていた時、

「ぶえくしっ！」

篠原は家でくしゃみをしていた。

「あれ？今って夏だよな……誰かが俺の噂してんのか……？」
自分のしたくしゃみについて真剣に考えていた。

指令13..お向かいさんの愚痴

「じゃ、俺は帰ります」

允博は闇藤の居る部屋から出ようとした。

「ああ、帰る途中に殺人鬼に襲われるなよ」

允博は「ははは……」と小さく笑った。

闇藤の居る会議室のようなどこから出て允博はエレベーターのボタンを押した。

「後は、篠原さんに……」

携帯の電源を入れたところで允博の動作は止まった。

「篠原さんはお隣さんだから明日でもいいか」

携帯をポケットに仕舞おうとした時、携帯が鳴った。

「……誰だっけなあ、この着信音……」

画面の表示を見ずに通話ボタンを押した。

「はいもしも……」

『おい、允博!』

「あれ、どうしたんですか？阿河さん」

阿河だった。

「……何ですか？仕事を外された？知りませんよ、そんなこと」

『知らないワケ無いだろ!』

「知りませんよ。あ、エレベーター来たんで切ります。じゃ」

允博は強制的に電話を切った。

「あーあ、闇藤さん、どうすんだか……」

電源を入れっぱなしにしていたらまた電話が掛かってきそうだなと思ひ、允博はまた携帯の電源を切った。

μμμμμμμμ

「あの野郎、電源切りやがった……」

叫悟はそう言って携帯を机に放り投げるようにして置いた。

「ったく……、何なんだよアイツら……。闇藤みてえな事しやがって」

ベッドに横たわって叫悟は愚痴を零す。

「アイツは殺す、絶対殺す」

叫悟は目を閉じてても同じ様な事をぶつぶつと呟いていた。

μμμμμμμμ

「篠原ア——」

允博は篠原の家のドアをノックする。

「篠原アアア——」

連続で六回以上ノックしても篠原は出てこなかった。

「…………。灯油撒くぞ、コラア」

「ああああ、待て待て！灯油は撒くな！撒くなボケエ！！！」

篠原は変な事を叫びながら出てきた。

「何だ、允博か。チッ」

「何で舌打するんだよ。俺がタチの悪い借金取りとかだとも思っただのか？お前、感じ悪いぞ」

「元々だ。で、何の用だ？」

允博は篠原の家の中に入る。

「おっ邪魔しまぁーす」

「あ、おい！勝手にはい——る、な——……ってもう遅いか」

篠原は諦めたようにドアを閉めて允博の所へ向かった。

「闇藤さん、何て言ってたんだ？」

篠原は訊く。

「『俺の決定は絶対だ』とか、何とか抜かしてたけど、阿河さんは抜くって電話させた」

「へー……。ん？電話させた！？お前が！？闇藤さんに！？」

允博は頷く。

「ワンオクのチケットやるからって言ったら快く、阿河さんの家に電話掛けてくれたんだよなあ」

「快くじゃないだろ、絶対それ軽い脅しだから」

允博は「ワハハ」と笑う。

「やっべー、何この人？誰だよ、この芸人」

「知るか。ってか、画面の右上とかに書いてあんだろ」

允博は画面の右上を見る。

「あ、なんだ陣内かよ」

「お前、陣内も分からなかったのか！？」

允博は篠原の冷蔵庫を探って缶ビールを一本出す。

「あっはははは！」

「お前ってケチィよな……。俺のも出してくれたっていいじゃねえか」

愚痴を零しながら篠原は冷蔵庫を探る。

ビールは允博が今飲んでいたので最後と気付くのは三秒後であった。

時間は午後十時五十七分。

「陣内が面白かったー、じゃ、篠原さんまた明日来るからな。ビールは十本用意しとけ」

そう言って允博は家の鍵を出した。

「お前が持参しろ！俺はもう金使わねえからな！」

允博はもう家に入っていた為、篠原の声は通路に虚しく響いて消えた。

「何だよ、チクショー！人の話は最後まで聞けって小学校の先生とかに言われただろうが！」

篠原は大声で愚痴を言いながらドアを閉めた。

愚痴を言う篠原に対して、篠原の家の向かいの部屋に住む人に

「お前が人の話を聞いてないんだろが！」

と愚痴を言われているのを知らなかった。

指令14..阿河家の事情

翌日、午前八時七分。

「篠原さん、入れてください。小丘です。お隣の小丘允博です」
早朝と言うには少し遅い時間に、允博は近くのコンビにの袋を手
下げて篠原の家に訪れた。

「うっせえなあ、今何時だと思ってんだよ……」

「ほらほら、ジャンプ持ってきたから」

「……………二十後半の大の大人が、何でジャンプ買ってくるんだ
よ。週間か？月間か？それともヤングか!？」

「ジャンプ・コミックスデラックス」

二人に沈黙が訪れる。

断っても絶対に帰ってくれないだろうと篠原は思い、仕方なく允博
を家に上げる事にした。

「ってか、何で長い名前の方買ってくるんだよ」

「嘘だって！ビジネスジャンプだってば」

允博は袋からジャンプをだしてばらばらとページを捲る。

「何お前？怨み屋本舗から読むのか？」

「うっせえなあ、俺が何読もうと関係ねえだろ」

允博は漫画に没頭する。

「……………お前何しに來たんだよ」

「……………」

「聞してるか？」

「……………」

「聞いてねえな、こりゃ」

允博は、ぼそりと「うるせえ」と呟いた。

「おい、篠。メタ原。怨み屋本舗、俺の家から持ってきて」

「何で俺が行かなきゃなんねえんだよ」

「いいから、早く取って来いよ」

篠原は仕方なく立ち上がって允博の家の鍵を受け取る。

「何巻から取ってくりゃいいんだ？」

「全巻取って来い」

篠原は黙って允博の家へ向かった。

「落としたらブチ殺すからな」

允博が言ったあと、携帯が鳴った。

「はい、もしもし。闇藤さん？」

『ああ、俺だ。阿河の情報がさっき俺の方に流れ込んで来た。突然で悪いんだが、今から叫悟の家に向かってくれ。場所は——……』

「分かった。付いたらまた連絡する」

そう言って允博は通話を切った。

允博は急いで玄関へ向かう。

「何でまたこんな時に……」

ドアを開けると、漫画を大量に持った篠原が居た。

「おい、メタ。闇藤さんから指令が来た」

「え、ちょ待て」

「漫画はいいから、俺の家の鍵返せ」

篠原はポケットから鍵を出す。

「あ、漫画家に置いといてくんねえか？じゃ、二分後に下で」

允博は自分の家のドアに鍵を突っ込み鍵を回す。

「阿河さんの家のことだが、何か楽しいことになってきたな……」

允博は自分の筆筒の一番下に入っている銃を手取る。

先日使いそびれた物であったりする。

「……俺、肩外れねえかな……」

允博は同盟に入った時に闇藤から受け取ったデザートイーグルを構える。

「あ、これ多分ダメかも……」

そう呟いたとき、呼び鈴が鳴る。

「はい、って、篠原か。準備万端みたいだな」

「おうよ。ってお前まだ準備出来てないのか？」

篠原は下に黒いジーンズ(?)に、黒いジャケット(?)を着て、
允博の推測だが、服の下には防弾ジャケットか何かを着ていた。

「…………お前何か準備万端すぎて感想言えねえよ…………」

「感想なんかどうでもいいだろ。早くしねえと呼んだタクシー来るぞ」

「タクシーかい！いつもはぶらぶら歩いて行ってるだろ！だからお前、メタボリックなんだよ」

允博は上着を羽織ながら言う。

「関係ないだろ。早くしろよ」

允博は銃を上着の内に付いているホルスターにデザートイーグルとベレッタM92を仕舞った。

「あれ、お前銃とかは？」

篠原はジャケットの内側を見せる。

「バタフライナイフ所持」

「…………お前どこまでボケる気だよ、置いて行くぞ！」

允博は篠原の頭を叩く。

「…………何か手応えあったぞ」

「まっさか。気の所為だって」

篠原は一旦家に戻って銃を取りに行って着いていたタクシーに乗り込んで阿河の家に向かった。

指令15：阿河邸下調べ編その1

タクシーに乗り込んだ二人は、運転手に目的地の場所を告げた。

「……あれ、何か見たことある顔だと思ったら、真木野^{まきの}じゃん」

允博は運転手に話し掛ける。

「お、お客さん久し振り。何？仕事ですか？」

「え、何？お前ら知り合い？」

篠原は二人の会話に参加する。

「ま、知人だな」

允博は篠原の質問に答える。

「いやいや、知人でもんじゃないでしょう？お客さん。私等は高校からの付き合いじゃないですか」

「知人じゃねえか」

「え、お前らそんな前から知り合いなのか？俺的に允博って友達居なさそうに見える」

允博は篠原の方を向く。

「そのセリフ、そっくりそのままテメエに投げ返してやるよ」

「何言ってるんだ、允博オ！俺にだって知人（？）と言えるくらいの人^{ひと}は居るぞ！」

允博は「嘘っばい……」と小さく呟く。

「さあて、お客さん。着きましたよ」

「おい、メタ金払えよ」

篠原は允博の方を向いてチツと小さく舌打して代金を真木野に渡す。

「じゃーな、允博」

「二度と会いたくねえよ」

允博と真木野は短く会話をして、允博は叫悟の家へ、真木野は仕事場へと向かった。

「……何となくだが、俺入りづらい雰囲気だったな……」

「アンタが会話に入る雰囲気はボケの時だけだからな」

允博は一人先に阿河の家に入る。

「……にしてもデケェな、阿河の家」

篠原は普通の感想を言う。

「普通すぎて状況が分からねえだろ」

「豪邸！以上！」

允博はその二秒後に篠原の頭を軽く叩いた。

「よーっし、殺し屋同盟・“解散組み”の初仕事だ」

「よくよく思えば“解散組み”要らなくね？」

「さあ、行こうかメタ原さん？」

允博はベレッタM92の銃口を篠原のこめかみに当てる。

「はい、すいません。ボケててすいません。ちゃんとやります」

允博はホルスターに仕舞う。

「あ、そうだよ。入る前に闇藤さんに連絡しねえと」

携帯を取り出し、闇藤の携帯に電話をする。

ΨΨΨΨΨΨΨΨ

「もしもし、闇藤。允博、着いたな？」

携帯の向こうで允博が返事をする。

「いいか？二回ぐらいしか言わないからちゃんと聞き取れ。今まさに、叫悟の父親、菟悟しゅうごが自分の部屋でヤクとかい로운取引やってる。それ止めて来い」

携帯の向こう側で允博が文句垂れる。

「あ、そうそう部屋は地下か二階の右端の部屋。どっちかだから、二手に分かれてやれよ。見つかったら……」

「見つかったら……？」と允博は復唱する。

「命は無いと思うな、じゃ頑張れよ。俺の名前は死んでも、死んだ後でも絶対に口にすんなよ。じゃ」

闇藤は携帯を半強制的に切る。

「……ヤッベ、地下の何階か言い忘れた」

闇藤は椅子から立ち上がる。

「まあ、大丈夫か」

そう言ってまた椅子に座る。

ΨΨΨΨΨΨΨΨ

「……あの人強制的に切りやがった……」

携帯の電源を切りながら允博は文句垂れる。

「じゃ、俺二階の部屋行くから、允博お前地下の方をよろしく頼んだ。じゃあ」

篠原はそれだけ言って敷地内に入る。

「おい、俺地下がどこにあるか知らねえんだけど……」

「直感で行け、直感で。じゃーなー、死ぬなよー」

篠原は姿を消した。

「……。何アイツ、取引だかなんだか知らんが、それが二階でやってたらどうすんだ？俺手助けせずに傍観者面してやる……」

携帯をポケットに仕舞って允博は敷地内に入った。

「にしてもだ、取引のブツとかは一体どうすんだ？」

允博は屋敷に近づく。

「……まあいい、それは入ってから決めるとしよつと」

允博は屋敷の正面に位置する入り口に走って近づいた。

指令15：阿河邸下調べ編その1（後書き）

秋山邸潜入編の様に長くなるかもしれませんが。
それでも呆れずに読んで下さったら幸いです。

指令16：阿河邸下調べ編その2

允博は今、閉まっている正面玄関のすぐ目の前に立っている。

「……。催涙ガスの方がいいのか？それとも、催眠スプレーとかの方がいいのか……？」

正面玄関突破について必至に考えていた。

「……仕方が無いから催涙ガスにしよう」

独り言をぶつぶつ言いながら允博は上着の右腕辺りに付いているポケットから小さい筒状の物を出す。

それは、催涙ガスが内蔵されている小さなバトンだった。

「普通なら、女の子が痴漢退治に使うんだが……。まあいい」

允博は一步一步前に進む。

取っ手を握って、勢いよく引いた。

「……おいおい」

扉には鍵が掛かっておらず、がらんとしていた。

「……ちよつと待て、行動が読まれてんのか？ふざけんじゃねえぞ」

允博は足音を立てないように静かに家の中に入る。

ふと、後ろに何か感じたので、反射的に構えた。

「よう」

後ろには笹原が立っていた。

篠原は右手を少し上げて挨拶をする。

「ようじゃねえだろ！今ので緊張感が崩れたぞ！？さあ、この責任どう取る？お前の残りの寿命か？」

「いや、寿命あげれないから。悪かったじゃあ」

篠原は通路をこっそりと通って行く。

「ガス噴射しとけば良かった……」

気を取り直そうと、深呼吸して振りかえろうとした時、背中に違和感を感じた。

「……」

背中には多分、銃口が当てられているだろう。

允博は推測した。

「動くなよ」

少しくぐもった声はそう言う。

「お前、誰？ 背中の物、さっさと離してくんない？」

允博は怯える様子もなく、言う。

「ふん、銃当てられているのに余裕をかますとは……。それ程、場数を踏んできたようだな、お前」

「場数じゃなくて、修羅だったけどな」

「修羅！？」

後ろの人物は声を上ずらせて言う。

「踏んできた数が、修羅だろうが、場数だろうが関係ない。お前はここで死ね」

フツと允博は笑う。

「甘い！！！！」

右手に握られていたままのバトンから、振り向くと同時にガスを噴射させた。

「な、何だこれは！？ うわ、目が……！！！！何が、甘いだ！お前の方は、どうなんだ！！！！」

白いガスの中で、げほげほと咳き込みながら涙を流して叫ぶ。

「じゃーな、素人」

「お前が素人だろうが、ボケエ！！！！」

允博は通路を掛け抜けて行った。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

「あれ、ここをどっちに進むんだっけ？」

篠原は殆ど迷子の状態になっていた。

「おい、やべえよ俺！大の大人が、家の中で迷子になっちゃってるよ、オイ！」

篠原は溜息を吐く。

「誰か迷子のお知らせしてくんねえかなー……」

軽くボケてみたが、虚しい静寂だけが返してきた。

『お前は黙れ』と。

「ちつくしよー、何で俺がこんな面倒な事やんなきゃいけねえんだ？意味分かんねえよ、ホント」

愚痴をぶつぶついいながら篠原は階段に近づく。

「お前、そこで何をしている？」

階段の一段めに足を置いた時、後ろから篠原を呼び止めた。

一応念のため右と左を確認した篠原は自分だと言う事をやっと認識した。

「あ、俺か」

振り返らずに惚けたように言う。

「お前以外に誰が居るんだ！？俺が俺に言ってんのか？俺、怖いじゃん！」

後ろに居る男は允博みたいな奴だった。

「……お前、芸人目指せよ」

「なれるか、んなモン！」

篠原はゆっくりと足を動かして二段目に足を置く。

「動くんじゃねえ」

「動いたらどうなるんだ？」

「どうなるかって？そうだな、地雷が爆発する」

「あつたら俺もう死んでる。足もげてるから。血でだらだらだよ」

篠原は言う。

「別にお前、俺が動いても撃たねえだろ」

「……さあ？もしかしたら撃つかもしれねえぞ？」

篠原はニイと笑うと、

「動くなって言われたらよお……動きたくなるのが、人間じゃん！？」

階段を一段飛ばしで駆け上って行った。

「あ、オイこら待てエエエエ……！」

二階に着くと、直ぐそこにあつたトイレに篠原は身を潜めた。

「畜生！！！！どこ行きやがったああああ」

叫びながらどこかへ消えた。

「はあ、あの人変な奴だったな……」

トイレから出ると、篠原は息を整えた。

「さって、行くか……」

篠原の後頭部に、ひやりとした感覚が全身に伝わった。

「ならば、お前は止まるなど言われたら止まるのか？」

「お前……」

振り返ろうとした時、

静かな屋敷に、銃声が響き渡った。

指令17..阿河邸下調べ編その3

「……あれ、今銃声した？」

允博は振り返る。

振り返っても篠原はいないのだが、何となく振り返った。

「……ま、大丈夫だろうーな……。多分」

允博は地下への階段を探し始めた。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

篠原は、その場に倒れていた。

「……。何倒れてんだ。起きろ」

その声で篠原は起き上がった。

「……あれ、俺死んでない。良かったー死んでなくて」

起きるなり篠原は安堵の言葉を呟いた。

「お前、人の話聞いているか？」

首だけ動かして辺りを見回す。

目の前、後ろには誰も居なかった。

「え、何？これ、イジメ？俺全然分かんないんだけど」

「いや、ここだから、ここ」

声のした方を篠原は見る。

「あれ、何か――……。幻覚が見えるなあ……。天井から人なんて、有得ない光景見てるんだけど……。お前、誰？」

「その様子じゃ、鈍いのは昔から直っておらんようだな。厚輔」

篠原は座ったまま、硬直した。

「どうしたんだ？」

天井から降りてきたのは、茶髪の男。

歳は篠原と同じ位。

「いやあ……久し振りじゃないか、厚輔。しかも、こんな所で会えるなんざ、誰も予想しなかっただろうな」

篠原は口をぱくぱくとさせる。

「お前、何でここに居るんだよ。刑務所かなんかにブチ込まれたとか、何とか……アイツが……」

「おやあ？お前、何も知らされてなかったのか？……ま、こんな話どうでもいいか」

篠原は何かを考えている顔をしていた。

「何してるんだ？」

「すんげえ、失礼だけどさ、名前なんだっけ？」

男は床にズツ扱けた。

「昔の漫画みたいだな」

「お前、何で知人の名前を覚えてねえんだ！？頭大丈夫なのか？本当に……！名前忘れるとか、ホント最悪だろ、お前。脳にDVDのディスクかなんか入れられたいか……！？」

篠原は「ははは」と笑う。

「一回しか言わないからな。日影祥^{かかげしょう}……これで思い出したか……！！」

篠原は口を開けて手を打つ。

「ああ……！日影^{ひかげ}って書いて、“かかげ”って読むんだっけ」

祥は嫌そうな顔をする。

「そう言えばよお……お前、脱退したとか……」

篠原の表情が変わる。

「……俺はもう戻らないさ。あんな、犯罪者の集まりなんかには」

「殺し屋も一応犯罪者だと思うがな」

祥はニヤリと笑った。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

「あっちゃー……これはちょっとヤバいかも」

允博は階段を降りながら小さく呟く。

「これで俺のところが当りだったら、あのひと闇藤どうすんだ？」
今、允博は地下一階に着いた。

「……ってか、どこですか、ここは……！」

允博の直ぐ目の前には鉄製の扉があった。

「これ開けろって？無理無理無理……！見つかる！死ぬ！確実に死ぬ！」

だが允博は開けた。

鉄と地面が擦れる音を立てる。

「俺、この音嫌いなんだけど……」

足音を立てないように入った。

奥から光が見えていた。

「……。当りかぁ……？」

允博は携帯を出す。

「あ、間違った……」

仕方なく立ち止まって上着を探る。

「止まれ。お前何してんだ」

允博は両手を上げる。

「何も？ただ、見物しに来ただけだよ」

允博は振り向かずに言う。

「さっきは、どうも……。お前だろ？ガス振り撒いてったの」
允博は黙る。

右手には、何故か弾があった。

「いやあ、あん時の人か。ごめんなさいねエ、初対面だったのに、ガス撒いちゃって。反射的に……」

允博は奥に突っ走る。

「テメエ、また逃げる気か、この野郎……！！！！」

愚痴を零すなり発砲する。

「撃ってんじゃないねえ！当たたらどうしてくれんだ、テメエは！？」
明りの方に允博は走る。

「え、何コレ！？コレ降りるのかあ！？」

石畳が二枚ほど、地面に置かれていた。

「ふざけんじゃないねえぞ、コラァ！」

怒鳴って允博は石畳の剥がされた所に、備え付けてある階段も使わずに、飛び込むようにして降りた。

指令18：阿河邸下調べ編その4

「待ちやがれ!!!」

允博は声を無視して、地面に着地する。

目の前には、黒いソファに座る、二人の男。

その周りに同じような恰好をした男が数人いた。

「誰だ!」

「おお?こんな所で……。取引か何かですか?」
座っている男の一人が立ち上がる。

「誰だ、お前は」

「誰かです。名前は名乗りたくないんで、匿名希望っつーことにし
といてくだ、さい!!!」

允博は銃を両手に持って男に突きつける。

「これ、仕事なんで。口出ししないで下さいよ?」

允博はニイと笑うと、何発か発砲する。

「おい、阿河!お前か!」

走りながら、片方の男は言う。

「そんな馬鹿げたこと、誰がするか!」

ソファに座っていた男が立ち上がって逃げる。

「アンタが阿河菟悟か?」

允博は同じ恰好をした男たちを倒して、二人の後ろを走って追いかけていた。

「こりゃ、残念。俺から逃げれるとでも思ったのか?」

允博は菟悟の後頭部に銃口を突きつけて言う。

「大人しくしな。抵抗しなかったら殺しはしない。殺しはあんまり、好きじゃないんでな……」

阿河菟悟は足を止める。

「阿河!これは一体どう言う事だ!!!」

「知るか!お前じゃないのか!」

允博は溜息を吐く。

「殺人予告しときます。阿河菟悟、また今度殺しに来ます。今週中に……」

允博は一発撃つと、菟悟が持っていたケースを奪った。

「待て、お前何する——」

「別に？」

冷たい口調でそう言うとな来た道を辿って階段を上って菟悟たちの前から姿を消した。

「阿河、この失態、どうする気だ!!?」

「知るか!!!」

菟悟は机を蹴飛ばした。

ㄖㄖㄖㄖㄖㄖㄖ

「おい、厚輔。今誰かが撃ったぞ」
祥は、ぼそりと呟く。

「聞こえなかった。お前の聞き間違えだ」

「場所は、一階より下だな」

篠原は、ハッとする。

「允博か……?」

「あ、お前の新しいお仲間か？」

「うるせエ、下から音がしたんだったら、俺はもうコッチには用は無くなった。俺はもう立ち去るから」

祥は篠原に近づく。

「そう簡単には帰せないぜ？」

「何だって？ちよっとお茶飲んでけってか？」

「ちっがーう!!! 馬鹿だろお前!」

祥は左手からナイフを五本ほどだす。

「俺と再会したんだ、俺を裏切った代わりに、ちよつとぐらい怪我して帰ってくれないと、つまんねえじゃねえんよお……」

祥は篠原目掛けてナイフを五本同時に投げる。

「うっわ、これ刺さったらどうなんだよ!!!」

咄嗟に避ける篠原。

「刺さったら? そうだなあ、馬鹿になる」

「俺は元々馬鹿ですけど!!!?」

祥は動きを止めることなく、ナイフを投げ続ける。

「って、待て何か、数増えてねえか!」

「気の所為、気の所為。……いや、気の所為じゃないな。うん、増えてるよ。確実に」

避けていた篠原だったが、いつの間にか腕を切っていた。

「おーい、避けるだけじゃダメだよー、本当に殺すよ?」

篠原は後退る。

「……スマンな、お前の相手してやれるほど、暇じゃないんで……。またいつかここに来るかもしれないから、そんな時暇だったら相手してるよ!」

篠原は階段を駆け下りる。

「……暇じゃないって? それは俺のセリフなんだけど……。でも、アイツいいこと教えてくれたな……」

祥はニヤリと笑った。

士士士士士士士士

「あ、篠原さんじゃん。無事だった——じゃなさそうだな。どしたんだ？」

「これはちよいとな、梃子摺ったって言うのか？」

篠原は腕を押さえる。

「ってか、足も怪我してね？切れてるっつーか、挟れてるっつーか……。俺まで痛くなるから、止めてくれ。早く病院に行ってくれ、頼む、逝け！」

「俺はこんだけで死ぬほど弱くねえ！」

篠原は溜息を吐く。

「どうだったんだ？そっちは。やっぱ当りか？」

「当りだったさ。今時、地下で取引か何かって、バツカバカしい」

允博はケースを篠原に渡す。

「何で俺に渡すんだ？俺、怪我人なんだけど」

篠原の声は無視して言う。

「多分、これ中身入ってるかもしれねえ」

「多分って何だ、多分て」

「さあ？」

允博は真顔で言う。

「允博、真顔で言われても困るんですけど」

「さって、闇藤さんのトコに行くか！」

「……俺、病院行っていい……？腕と足に尋常じゃない痛みが」
そんな篠原を允博は軽くスルーして闇藤の所へ向かった。

指令19..始末屋

真青な空を、闇藤了後はぼーっと眺めていた。

「やつみどうさん！」

允博は叫ぶ。

「ぎゃあああああああ！！鼓膜が、鼓膜が破れるあああああ
！！！！」

闇藤は右の耳を押さえて机に伏す。

「あ、やつべえ。闇藤さんをいとも簡単に殺しちゃったよ。どうしようか、篠原さん」

「知らねえって……。ってか早く俺を病院に行かせてくれ。何か痺れてきた……」

闇藤は起き上がる。

「で、ご苦労だったな」

「切り替え早ッ！！！」

篠原は最早ツツコミを入れる気力も無かった。

「篠原、お前は病院に行け、一人で。それで、允博どうだったんだ？ 阿河邸は」

「……広い豪邸でございやした」

「そっち聞いてねえ。雰囲気だ、雰囲気」

「雰囲気ィ？ ああ、何かガラーンとしてたような、してなかったよ
うな……」

闇藤は溜息を吐く。

「説明不足ですみませんね。俺、説明すんの嫌いなんですよ」
「へーそうだったけ？」

闇藤はぼーっとした顔で言う。

「阿河さんの親父、似てましたね。間違って叫悟って言いそうになりましたよ」

「言えばよかったじゃないか」

「嫌な奴だよな、アンタって……」

允博は言う。

「じゃ、何となく篠原さんの腕と足の細胞が心配なんで、病院に行つて来ます」

「北上きたがみらしい」

「病院名が？」

「……病院の名前以外に何があるんだ………？」

允博は理解したように頷くと、部屋を出た。

「……ふーん、北上の病院に行ったか、篠原さんは……」

允博は上がってきたエレベーターに乗り込んで、一階のボタンを押した。

エレベーターのドアが閉まりかけた時、叫悟らしき人の姿を見た。

「阿河さん!!?」

エレベーターはゆっくりと降りていった。

μμμμμμμμ

叫悟は静かに部屋に入った。

「闇藤さん」

「アイツ等の次は、叫悟か……。何の用だ？」

「今日、俺の家に男二人が入ってきました。その男の特徴は、背が高く、二十代くらいの男と、少し小太りの二、三十代後半頃の男。片方は阿河菟悟に殺人予告をして、売買される筈だったケースを持ち、逃走。もう片方の男は、日影祥の攻撃を受けたが、そのまま逃走していきました。……闇藤さん、允博と篠原……、俺の家に来た男ですよね？」

闇藤はクククと笑う。

「何故そう思う？」

「やり方が闇藤さんらしいからですよ」

「俺らしい……ねえ……」

闇藤は椅子から立ち上がる。

「よく分かったな、あの二人を動かしたのは俺だ」

「………何で俺に黙ってたんですか？」

闇藤は振り返る。

「允博からの要望だ。“せめて阿河さん抜いてください”ってな」

「勝手な事を……。闇藤さん、俺もやります。いや、俺がやります」

「無理だな」

「何だと？」

叫悟は闇藤の胸倉を掴む。

「そう、乱暴する奴も駄目だ。俺は今回、お前だけを抜いてあの二人に任せようと思っている。今回のが終わったらお前は次回から誘ってやるさ。生きてたら話だな」

「生きてたらだと？何でそうなるんだ？」

闇藤は意外そうな顔をする。

「潰すなら、徹底的に潰す。いつか俺はそう言った。よく考えてみる、今まで潰してきたお偉いさんたちをよ。財閥だったか忘れたが、一番上が死んだら、その後には跡取りがいる。俺らはそいつらを殺していないだろ？だったら何で、あとが潰れてるか、分かるか？」

闇藤は叫悟の手を払う。

「始末屋がいるんだよ。跡取りとか、死んだ者の身内とかを殺す、始末屋が俺の後ろに控えてるんだよ」

「俺は、そいつに殺されるのか？」

「さあ？」

闇藤はニイと笑う。

「殺されなくなかったら、今のうちに何かしとくことだな」
闇藤は部屋を出かけた。

「なら、アンタを今ここで殺したらどうなる？」

叫悟は静かに言う。

「どうにもならねえさ」

闇藤は部屋を出てエレベーターのボタンを押した。

「俺、これから篠原の様子見に行くんだが、お前も来るか？」

「……………一応行きます」

叫悟はエレベーターに乗り込んだ。

「…………俺を殺そうとは思うなよ？ 殺しても何もなんねえからな」

「そうですか」

「俺は不死身さ！ “僕は死にましえ〜ん！！！” とか言う感じだな」

叫悟は闇藤の足を踏みつけた。

「いったたたたたたっ！！！！痛い！」

そうこうしている内に、エレベーターは一階に着いた。

「さて、行こうかな」

闇藤はエレベーターから降りて、入り口まで歩いていった。

「アンタを今ここで仕留めなかった自分に拍手だな…………」

叫悟は小さく呟いて、闇藤の後を追った。

指令20..篠原のお見舞い(?)

「ん？おい、叫悟早くしろ。俺には時間が無かったりするんだ」

「……知らねえし……」

叫悟はタクシーに乗る。

「北上病院まで」

運転手は帽子を深く被る。

「ってか、深く被ったら事故るだろ、普通」

叫悟は言う。

「あっははは！確かに！運転手さん、事故起こさないで下さいよ」
闇藤と叫悟を乗せたタクシーは、北上病院に向かった。

μμμμμμμμ

「篠原さん、腕と足の細胞大丈夫でしたか？」

「お前、心配するところ違うだろ」

允博は今、篠原の病室にいる。

「ってか、何でお前病室に居るんだよ」

「知らねえよ！ただの怪我かと思ったら、ただの怪我じゃなかったらしい」

「へー……。毒かなんか回ってたのか？」

「おい、毒回ってた俺、死んでるから。死んじゃってますから」
允博は珈琲の缶を開ける。

「やべえ、俺もコーヒー飲みたい」

「ゴミ箱にインしてるのでも飲んどけば？」

「俺はホームレスか何かか？」

允博は篠原の足を見る。

「ナイフで突っついていい？」

「怪我を酷くさせる気か！？お前は！！！」

「ところで――……」

允博はそこで黙る。

「え、何？何黙ってんだ？」

「正直に答えろよ、日影祥って、誰？それと、あんた殺し屋になる前に、何してたんだ？」

「お前、聞いてたのか？」

「悪いか？発信機とか、盗聴器とかでお前の会話とか聞いてたんだけどさ、何やってたんだ？お前は」

篠原はしばらくの間黙る。

「俺、殺し屋になる前に、犯罪者の集まりで作られた、小せえ組織って言うのか？そんなんに入ってたんだよ」

「つつーことは、元犯罪者か」

「そう言うことだな……。日影祥、アイツも、それに入ってたんだよ。一番気の合う奴でさあ……。実を言えば、祥は昔から俺の知り合いだったんだよ」

允博は「ふーん」と呟く。

「で、お前はその日影に誘われて、その組織に入ったのか？」

「まっさか……。俺はさ、お……」

「よー！篠原ア！生きてるかア？」

闇藤が邪魔しに入ってきたので、話は中断された。

「ん？何この空気読めと言いたげな雰囲気は？」

「………やみ藤さん……アンタ、何でもこうタイミングが悪いんだ……」

允博は肩を震わせて呟く。

「……闇藤さん、今度から大声出して部屋に入ってこないで下さい！今、すっげえいいところだったのによお！！！」

「ここはお前の部屋か!？」

篠原はツツコむ。

「おうおう、何話してたかはよく知らんが悪かったな」

「篠原、病院から出たらまた聞く」

「……そうか。って、あれ？阿河さんじゃねえか」

允博は顔を上げる。

「あれ、ホントだ。阿河さんだ。久し振り、しばらくの間見てなかったから懐かしく思うよ」

「勝手に思っつれ、ボケ」

「キャラ変わりましたね……」

允博はぼそりと呟く。

「あーあ、俺ハバネロ喰いたい。篠原、買って来い」

「闇藤さん、よく見て。俺怪我人！怪我してんのにハバネロ買って来いって？無理だよ！どうやってい行かってんだよ！鬼かアンタは！」

「そうだ、俺は鬼だ」

叫悟と允博は半ば呆れてその状況を見ていた。

「バツカバかしい……」

「そうだな……」

叫悟はふと思ひ出す。

今日起こった事を。

「…………。なあ、今日俺の家に入ったか？」

「何言ってるんですか？気のせいですよ」

允博は惚けたように言う。

「そうだよな、気の所為だよな……」

叫悟は気の所為にして済ませた。

本当の事を知っているのを隠して。

何時間か後に、三人は病室から出て行った。

「じゃーなー、篠原ア。また来てやるよ」

闇藤は酔っ払いのようなテンションで言う。

「闇藤さん……アンタはもう来ないで下さい……」

二人も軽く挨拶を済ませると、闇藤に続いた。

三人が帰った何分か後に、篠原が看護士に怒られたと言うことは、誰も知りもしなかった。

指令21..運転手真木野

「さて、允博。今回のことだが」

闇藤は帰りのタクシーの中で口を開く。

「おい、阿河さんいるじゃねえか。何でここで言うんだよ」

「あ？ああ、叫悟はもう知ってるぞ」

「あ、そうだったんだ。へー……………」

しばらくの間沈黙が訪れる。

「知ってるだあああああああ！？アンタ、何喋ってんだよ、バカですか？本当にバカですか！？」

「バカバカ、連発すんな」

「反応、遅」

叫悟はぼそりと言って窓越しの空を見る。

「ちょっと、何で話さなかったんだよ、バカ」

「バカって言うな」

允博は闇藤の頭を叩く。

「…………その様子じゃ、篠原さんにもまだ話してないんだろ」

「バレたか…………」

「バレバレじゃ、ボケェ！！！」

タクシーの運転手は帽子を深く被る。

「あれ、アンタ行きの時のタクシーの運転手？」

叫悟は訊く。

「はい、そうですか？」

允博は運転手の声に反応する。

「あれ、真木野…………？」

「やあ、お客さん」

「お前、何でいつも俺のこと“お客さん”って呼ぶんだ…………」

闇藤は意外そうな顔をする。

「あれ、お前等知り合い？」

「知り合いも何も、高校からの付きあ……」

「余計なことは喋るな。お前は前見て運転しろ」

真木野は困ったように笑うとハンドルを握る。

「んで、どうすんですか。今回の」

「勿論、叫悟は参加しないそうだな？」

闇藤は叫悟に訊く。

「ああ、今回は参加しない」

「今回のが完全に終わって、生きてたら叫悟は参加すると言っている」

「完全に？生きてたら？どう言う意味だ？闇藤さん」

闇藤はニヤリと笑うと、そこから何も喋らなくなった。

「阿河さん、どう言う意味ですか！？」

叫悟は深刻な顔をして喋らなくなった。

「一体、何なんだよコイツらはあ……！！」

「お客さん、うるさいですよ。タクシー内ではお静かに」

「黙れ、運転手！」

真木野もそれから喋らなくなった。

「この空気重いんですが……。黙れって事ですか？」

その言葉に三人は反応する。

「そうだ」

三人の声がハモる。

「………いらんとこでハモンな。気味悪い」

「運転手さん、止めてくれ。俺はここでいい」

叫悟は車を止めてもらい、降りた。

「じゃ、後の金はよろしく頼んだ」

「あ、じゃあ俺も降りる！」

闇藤も叫悟と同じ所で降りた。

「お前等あああああああ！そう言う魂胆か！最悪だろお前等あああ！覚えとれ……！！」

允博は動き出したタクシーの中でそう叫んだ。

「お客さん、うるさいですよ。お静かにお願いします」

真木野は前を向いたまま言う。

タクシーは允博の家へと向かった。

「おい、真木野」

真木野は無線機のスイッチを切った。

「何だ？允博」

「今回の件、どう思う？」

「さあ？100%上手く行くとは言い切れないな」

真木野は帽子を上げる。

「…………。お前等ンとこのやりかたは凄い無理があるからな…………。死者がでるのは当然だが…………。お前等の中でも、死者が出るかもしれないぞ」

「…………そうかい、そうかい。推測だけはちゃんと言うんだな。お前の推測はたまに当たるからな…………」

「推測者だからな。ってか、たまにじゃない、絶対当たるんだ」

真木野はフツと笑う。

「今回上手く行ったら、報酬の三分の一貰うからな」

「マジ!？」

「上手く行かなくても、金取るからな」

「お前、盗みに来るんじゃないの？」

真木野は言う。

「タクシードライバーは、お金なんて盗みに行きませんよ？」

「こういう時だけ何でドライバー気取るんだよ…………」

「それが、運転手真木野ですから」

真木野は得意そうに言う。

「知らねえよ」

真木野は無線機のスイッチを入れる。

「お客さん、お金はちゃんと払って下りてくださいよ」

「誰が乗り逃げなんかするか」

「二年前まではやってたよな？」

ニコリと笑って真木野は言う。

「いや、それは濡れ衣だ」

允博は真木野に代金を払う。

「ではまたのご利用、お待ちしとります」

「待たんでええわ、ボケ」

允博は道路を走っていくタクシーを見て呟いた。

「死者ねえ……。阿河さんと篠原、どっちなんだか。アイツ、絶対結末とか言わないんだっけ……」

允博はエレベーターのスイッチを押した。

「帰ったら篠原の家、ピッキングして漫画読もう」

ニイと笑うと允博はエレベーターに乗った。

指令22…篠原、病院脱走？

「あー……………」

允博は部屋の窓から真青な空を眺めていた。

「眠い………」

机に顔を伏せた時、携帯が鳴り出した。

「へい、もしもし」

『へいって何だ、へいって……』

「あ——…。その声は、篠原さんか？」

『お前、どんな耳してんだ！？ 閨藤だ、ボケエ』

携帯越しに閨藤は怒鳴る。

「何の用ですか？ 俺は今、凄い眠たいんですよ」

『お前の私事^{わたくしごと}なんか知るか。篠原が病院を抜け出した』

「あ、そうなんですか……」

允博と閨藤に沈黙が訪れる。

「……………ええ！？ 病院抜け出したあ！？」

『反応遅いって……！』

允博は立ち上がる。

「え、どこに行ったか知らないんですか！？」

『知らんからこうしてお前に連絡してんだろうが』

「いや、そう言われましてもねえ……」

允博が冷蔵庫に向かった時、誰も居ないはずの隣の部屋（篠原の部屋）から物音がした。

「閨藤さん、あいつ多分家に帰ってますよ」

『ええ？ 何で』

「さっき物音が思いつきりました」

允博は篠原の家の鍵をピッキングで開けて勝手に入った。

「はい、どうも篠原さん」

「ぎゃあああああ!!!!」

篠原はびっくりと反応して壁に頭をぶつけた。

「バカですか？アンタは……」

篠原は立ち上がる。

「何で来たんだ、お前はあ！」

「うるせえ、物音がしたから来てみただけだ！」

允博は床に座る。

「何で病院抜け出してきたんだよ！」

「はーい、病院の飯が不味かったからでーす」

允博は腕を組んで納得する。

「あー、確かに不味いよなあーあれ。じゃなくてさあ！」

允博は立ち上がる。

「お前、何！？小学生みたいな理由で片付けようとすんじゃねえよ、マジでバカか！？」

「って言うか、何で俺脱走犯みたいな扱いされてんの？」

「病院から脱走してきたからだよ」

「俺は退院してきたんだ！」

篠原は身を乗り出すようにして言う。

「嘘付くんじゃねえ！どうせ、自己判断で退院してきたんだろ」

「イエス」

「イエスじゃねえ」

允博は携帯取り出す。

「だってさ、闇藤さん、どうする？」

「えええええ！？ライヴだったの？生中継だったの！？」

携帯から溜息を付くのが聞こえた。

『篠原、お前切腹』

「切腹う！？このご時世に、切腹ですか！？」

『おうよ』

「闇藤さん、本題に入ってください」

允博は呟くようにして言った。

ΨΨΨΨΨΨΨΨ

「で、本題に入るがよ。阿河邸に、今晚乗り込め」

『早アッ！！！乗り込むの早ッ！』

允博は叫ぶ。

「まあ、頑張れ。警察とかは、いないっばいから」

『ぼいって何ですか！』

闇藤の手から携帯が奪われる。

「俺からの情報だ。文句あるのか？」

『え、阿河さん！？』

「叫悟、俺の携帯返せ」

叫悟は闇藤を横目で見た後、口を開いた。

「へマしたら、俺がお前を殺しに行くからな」

『え……ちよつとそれは、勘弁……』

叫悟はフンと笑う。

「まあ、允博、お前になら簡単に出来るだろうと思うが、手は抜くな。潰すなら徹底的に潰せ」

允博はフツと笑う。

『はいはい、分かりましたよ』

叫悟は允博の返事に満足そうに笑うと、携帯を闇藤に返した。

「……………ま、そう言うことだな。叫悟にほとんど言われたが……………」

『はいはい、分かりましたよ。今晚、乗り込みます』
闇藤は少し間を置いて通話を切った。

ΨΨΨΨΨΨΨΨ

「で、闇藤さん何て？」

「お前、聞いてなかったのか？ 今晚、阿河邸へ乗り込めだつてさ」

篠原は凄く嫌そうな顔をした。

「嫌なんだったら行かなくてもいいけど？ その代わり報酬は全部俺の物だな」

「いや、やっぱ行く。行きます、連れてってくれ」

允博はニイと笑うと、立ち上がった。

「阿河さんの父親だからって、俺は手エ抜かないからな」

「……そうかい、そうかい。分かったって」

「日影祥って奴に、潰されんなよ」

篠原は「はいはい」と返事を返す。

「さてと、俺はいろいろと準備してきますわ」

「ってかさ、よくよく思ったら、お前って俺に敬語使ってないよな」

「………気の所為ですよ？ あっはははは」

「いや、無理やり使うなって……。気持ち悪い」

允博は足を止める。

「おいおい……」

そう言いながらゆっくりと振り返った。

「お前、阿河の人たちより先にお前、のめすよ？」

「はいはい、すみせんねえ」

篠原は投げやりに謝罪した。

「…………もお怒ったからな。阿河から帰ったら覚えてろよ。この家の中、荒らしてやる」

允博はそう言って篠原の家を出た。

「覚えてろよって……、お前、悪党か何かか……………」

篠原の呟きは阿河邸に入る直前に允博のパンチで返されると言うことは、篠原は知りもしなかった。

指令23..阿河邸潜入編その1

深夜、零時。

「おい、行くぞ篠原さん」

允博は篠原の家の前に立っていた。

「へいへい……ちよっと待てよ……」

篠原は家から出ると、暗闇の中で允博を探した。

「おい？どこだ、允博オ？」

「こっちだって、こっちこっち」

篠原は後ろを向いた。

「がふっ！！！！」

顔面に允博の拳が命中した。

「……ってえ」

「おいおい、忘れた訳ねえだろ？自分の言った事」

「え、俺なんて言った？」

允博は影の差した顔でニヤリと笑うと、殺気を放っているようにして言った。

「覚えてろよって、悪党かな何か？って言ってたろ？」

篠原は目を逸らす。

「さーあ、行こうか？允博君」

「黙れ」

允博はエレベーターのボタンを押して、篠原の足を踵で踏んだ。

「いったいたいたいたいたいたい！！！！痛い！！」

エレベーターが着たので、允博は乗った。

「畜生、俺がお前より若かったら……」

「お前年増ですか？」

允博はエレベーターをさっさと降りると、目の前に停車している車に乗った。

「え、乗っていいの？」

「いいから、早く乗れ！」

篠原は遠慮しがちに乗った。

「はい、お客さん。どちらまで？」

運転席に座っている真木野はにこりと笑う。

「阿河の家まで。ってか、プライベートでも、俺のことを“お客さん”呼ばわりすんな」

「あ、真木野さんだ」

「どうも、篠原さん。今日も允博に嫌がらせされたみたいですねえ」
允博は真木野の被っている帽子を取る。

「嫌がらせなんかしてねえ」

真木野は「ははは」と笑う。

「どうだ？ 誰か、死者は出るのか？」

真木野は唸る。

「え、何の話してんだ？」

「あ？ 今回の事だよ」

篠原は訳がわからないと言いたげな顔をする。

「そうだな、阿河菟悟は撃たれて死ぬが、お前等の中で、病院送りになる奴が出る」

「それは、誰なんだ？」

真木野は笑う。

「今ここで言っちゃつまらんだろ？ お楽しみは後にとっときな」

篠原は黙ってその話を聞いていた。

「真木野さん、アンタは何だ？」

「コイツは推測者だ」

「へー、そうなんだ。初めて知った」

篠原はしばらくの間黙る。

「推測者って何だ？」

「疑問に思うところが全然違うんだけど？」

真木野はクククと笑っている。

「さあて、目的地に着いたんですが……？」

真木野は阿河の家から数十メートル離れた所で止めた。

「さて、行くか。篠原さん」

允博は車から降りながら言う。

「あ……、ああ。分かった」

篠原は腕を押さえて言った。

「……じゃ真木野。またここで」

真木野は笑うと、車を走らせた。

「よっし、準備は良いか？篠原さんよオ」

允博は右隣に居る篠原に訊く。

「いつでも行けるさ」

「んじゃ、阿河菟悟との、第二ラウンドとでも行くか？」

「第二ラウンドは恰好悪い。二回戦で良いだろ」

允博はフツと笑う。

「どっちでもいいや。行くぞ、篠原ア……！」

允博と篠原は阿河邸へと、足を踏み入れた。

指令24..阿河邸潜入編その2

允博と篠原は、阿河邸へと足を踏み入れた。

「なあ、阿河ってどこにいますか？」

允博は篠原に訊く。

「さあ？　ってかさ、いつも思うんだけどさ、闇藤さんって一番大事なこと言い忘れてるよな」

「そうだよな……よくよく思えば腹立つよな」

允博は影を歩く。

「篠原さん、そこに灯りが点いてるところあるじゃん？」

允博は前方を指差す。

そこには灯りで照らされている。

「そこを、パラパラ踊りながら通ってくれ」

「あー、パラパラなあ……。ってか、お前何する気だよ！？」

「題して、篠原を囷にしよう大作戦！」

允博は真剣な顔で言う。

「バカだろ。お前絶対俺よりバカだろ」

「俺よりって……お前、自分がバカってこと承知してんだな……」

允博は歩き出す。

「さて……。じゃ、篠原。俺は行く」

允博は灯りの方へ飛び出していった。

「え、あちよつと允博オオオ！？」

允博は近くの大きな窓硝子に体当たりをする。

勢い余って床に倒れた。

「お前か、菟悟様を殺しに来たと言うのは……！」

目の前には阿河の家の使用人が数名いた。

起き上がった允博はニイと笑う。

「そうだけど？」

「捕らえろ……！」

允博は指と指の間に小さい筒を挟んでいた。

「うるさいからさあ、ちょっと黙っててくれよな」

その筒を使用人に向ける。

「な」

「そんじゃ、ここは通してもらおう」

筒からは、白い煙が噴射された。

筒の側面には、允博が書いた字らしく、催眠ガスと書かれていた。

「いやあ、防犯グッズってのはここで役立つな」

允博は一階にある部屋を詮索し始めた。

「の、允博!」

「ああ、篠原。どしたんだ?」

「お前さ……人来るぞ?」

篠原の言葉に允博は真顔で答える。

「え? もう来てらっしゃいますか?」

後ろに、茶髪の男が一人、立っていた。

「……………しょ、祥……………」

「へー、こいつが日影祥? 意外と普通だな」

允博の反応に祥は笑う。

「ハッハハハハハハハ、普通? お前の方が、普通だと思うがなー」

祥はニヤリと笑う。

「いやあ、二日三日顔合わせてないだけでも、久し振りに思うなア」

「うるせえ、テメエは少し黙ってろ」

「篠原、俺どうすればいい?」

允博は訊く。

「絶対に手は出すな。出したら仕返しに怨み屋本舗を全部貰うからな」

「ちっさ! 仕返しちっさ!」

「うるさい、お前も黙れ」

允博は仕方なさそうに黙った。

「ククク……。これからどうするんだ? 厚輔エ。そいつにお前のこ

と話したのか？」

「まだ喋ってない。ってか、話す気なんか無えし」

「な、篠原さん、話が違うじゃん！」

「お前は黙ってろ！！！」

篠原は振り返らずに言う。

「祥、お前は何が言いたい？」

「別に？喋ってもいいんだったら、何でも喋ってやってもいいけどな。あの連中のこととか」

篠原は歯軋りする。

「何も喋るんじゃない、何も言うな。允博コイッの前では俺に関すること
は何一つとして喋るんじゃない」

祥はクククと笑った。

ΨΨΨΨΨΨΨΨ

「さって、俺もそろそろ行こうかな」

闇藤は椅子から立ち上がって言う。

「……どこに行くんですか？」

叫悟は訊く。

「え、どこって？阿河の家にだよ」

「何しに行くんですか？金なら、三階の右から二番目の部屋にある」

「ラッキィー叫悟ありがとう、お前は嫌な奴といい奴の面を持ち合
わせた、最悪な人間だ」

「闇藤さん、最悪な人間なのか、いい人間なのかハッキリしてくだ
さい」

闇藤は笑う。

「アッハハハ、すまん。ハッキリ言えば、嫌な奴だ。自分の家、阿河を裏切って、こうして悪人の俺に情報を流してんだからな」

「結局は嫌な奴じゃないですか……」

叫悟はしばらくの間黙った。

「闇藤さん、俺はもう、阿河の人間じゃありませんよ？」

「ええ？」

「俺はもう、“阿河叫悟”じゃありません」

闇藤は振り向きながら訊く。

「じゃあ、お前は誰なんだ？」

叫悟は笑う。

「俺は——」

叫悟の言葉に、闇藤は笑った。

「そうかよ。じゃ、ここはよろしく頼んだぜ、叫悟」

闇藤は銀色に光る、アタッシュケースを持って下に降りて行った。

「頼まれても、俺何もしませんがね……。するとしたら、アンタの情報網だけです……」

叫悟は闇藤の座っていた椅子に腰掛けると、フツと笑った。

指令25：阿河邸潜入編その3（前書き）

コメディな筈なのに、今回は何故かシリアス系になってしまいました。
た・・・。

ここで篠原さんの過去が最後の方で明かされます。

指令25..阿河邸潜入編その3

「さて、どっから話してやろうか。なあ？厚輔」

祥はナイフを遊びながら言う。

「何も話さなくていい。俺はお前をブツ倒して、阿河菟悟を殺さないといけないんだ」

「ふーん……で？」

祥は横目で篠原に言う。

「それだけだ。後は他の誰かの仕事だ」

「へーえ……いろんな事を喋ってくれるんだねえ、厚輔は」

允博は銃を出す。

「他には何喋ってくれるんだ？」

「黙れ。それ以上喋るんじゃない」

允博はそう言いながら、狙いを祥の額へと定める。

「止める允博、コイツは俺が——」

「ウザいんだよ、お前はあ。さっさと殺せば済むのによオ、何だらだらやってんだよ」

篠原は黙る。

「アンタがしねえなら、俺がやる」

人差し指を掛ける。

「何だ？俺を撃つのか？だったらまだ気が早いだろ？菟悟さんの居場所吐かせてから殺すだろ、普通はよ」

允博は目を少し細める。

「じゃあ、言え。阿河菟悟の居場所はどこだ？」

祥はニヤリと笑う。

「じゃ、教えてやろう。俺からの条件を聞く前にだ」

「早く言え！」

「三階の右から二番目にある、金庫室に閉じ籠ってる。……さあ、次は俺の番だ」

「三階の右から二番目の部屋、金庫室か？」

「え……何、立ち聞きしてたんですか？　もしかや元ストーカーとかしてましたか？」

「する訳ねえだろ。ボケェ」

篠原はボーっと突っ立っていた。

「篠原さん」

「放っとけ。行くぞ、允博」

允博は闇藤に引きずられながら行った。

「……闇藤さん、アンタは血も涙も無い、鬼ですか？」

闇藤は笑う。

「俺には、血はある。涙なんて物は知らない。それに、鬼だったら頭に二本の角が生えてるはずだ。そうじゃないか？」

「幻想っすね……。篠原さんが可哀想ですよ」

闇藤は微かに笑う。

「可哀想、か……。俺は別にそうは思わんがな」

允博は後ろを振り向く。

「篠原さんの過去、ちょっとばかり知りたかったなあ……」

「え、お前知らないのか？」

ややムキになって允博は言う。

「知りませんよ！　家、隣なのに、何も知りませんよ！　無知ですいませんね！」

「いや……。誰もそこまで責めてないだろ」

「何してたんですか？　あの人」

闇藤は少し間を開けて答える。

「……アイツな、いつか世間を騒がせた、殺人鬼だったと」

「さ……」

允博は驚きの余り舌が絡まった。

「な、何でそんなこと……」

「さあ？　確か、さっき俺が撃った奴も居たと思うがな」

「日影様ですか？」

闇藤は「それぞれ」と言う。

「一回捕まったってニュースであっただけどな、それがまた、凄い組織の組み合わせで……」

「闇藤さん、もういいです。後は自分で調べますから」

「図書館で？」

「俺はもう、図書館なんか行きません。真木野がいるんで」
闇藤は訊く。

「ちょっと待て、真木野って奴は、本業タクシードライバーじゃないのか!？」

「それしながら何かやってるっぽいです(嘘)」

「へえー、そうか凄い人だな、真木野さんは」

闇藤は允博の言葉を信じてしまっていた。

「ちなみに、アイツ予言者です」

「流石にそれは、嘘だろ」

允博はチツと舌打つ。

「三階着いたぞ」

そうこうしていたらいつの間にか三階に着いていた。

「んで、右から二番目の部屋だったよな？」

闇藤はドアノブを握る。

「構えろ」

銃を構える允博。

「はい、どうも。阿河菟悟さん」

闇藤は余裕そうな声でそう言った。

「お前は……誰だ!？」

阿河菟悟は、金庫と思われる大きな箱の前に、蹲っていた。

指令26…阿河邸潜入編その4

「誰だ……お前は」

「俺？お前如きに誰が名乗るか」

闇藤は菟悟に言う。

「答えろよ……！お前は、誰なんだ……！！」

足元にあった銃を闇藤に向ける。

「答えろ、じゃないと殺すぞ……！！」

「どうぞ御勝手に。俺にはお前より強い方が居るんでねえ」

允博の顔を見た途端に菟悟の顔が変わった。

「お前は……！あの時の！」

「どうも、ご無沙汰してます」

允博は半分ふざけて言う。

「何が、ご無沙汰だぁ？俺はお前のことなんか知らねえよ」

「俺ですが」

「そう言えば、ここの長男、この家とは縁を切ったとか」

「何だって？」

菟悟は床に銃を落とす。

「何でお前が知ってるんだ！」

「叫悟はよく知ってますよ。こいつも知り合いですから」

菟悟は允博を見る。

「お前等……と叫悟が？ふざけるなよ！」

菟悟は闇藤のスーツを乱暴に引っ張って允博から遠ざけると、闇藤のこめかみに銃口を当てた。

「……何の真似だ？阿河」

「お前は俺の人質だ」

「普通逆だろ、お前が俺の人質だ」

菟悟は銃口を天井に向けると、一発発砲した。

「見たか？ちゃんと弾は入っている。そこのお前、コイツを撃たれ

たくなかったら、大人しくしろ」

允博は銃を下ろした。

「残念ながら、それは無理なお願いだ」
後ろから、誰かが菟悟の足元を撃った。

「あ、阿河さん！」

「はい残念。俺はもう阿河叫悟じゃねえよ」

「じゃ、叫悟さんで行くか……」

叫悟はニイと笑う。

「よお、阿河菟悟」

「きよ、叫悟……。何で、ここにいる」

「そいつを離してもらおう。そうしたら、ここに戻ってやってもいいけど？」

菟悟は狂ったように笑い出した。

「はははははははははは！！！！じゃあ、離してやるよ！」

闇藤の背中を押して、前に一步踏み出させた後、銃を構えた。

「やめろ！阿河！！！！」

菟悟はニイと笑っている。

「闇藤さん！」

菟悟は引き金を引いて、闇藤を撃った。

その後に、菟悟は血を流しながら倒れた。

「さ、篠原……さん」

三人の後ろに、篠原が立っていた。

「篠原……」

「闇藤さんを、病院に連れてけ。俺がここに残る」

闇藤は、げほげほと咳き込みながら血を吐いている。

「闇藤さんの背後を取った罰さ」

篠原の目が、いつもと違うのを、允博は微かに感じていた。

「篠原さん、残ってここで何するんだ？」

「有りっ丈の金をアタッシュケースに詰める」

「それが目的かよ！」

叫悟は階段を降りていた。

「待て、反逆者」

叫悟の前には、使用人が路を塞いでいた。

「反逆者だあ？裏切り者の間違いだろ」

「どっちも同じだ！」

使用人たちは凶器を叫悟に向ける。

「どけよ、使用人が」

允博はデザートイーグルとベレッタM92を突きつける。

「いや、それだけじゃ甘いよ」

誰かが使用人の後ろで呟いた。

「どうも、小丘允博さん」

使用人の間から出てきたのは、中学生くらいの少年だった。

「誰、だ？お前……」

「抹……充」

闇藤が口から血を流しながら呟く。

「抹充瞬だ……。始末屋の……」

「こんなちっせえ餓鬼が始末屋！？ええええ！？」

「ちっせえとか言うな、バカが」

「だったら、後ろの奴、どうにかしろよ」

瞬はくると回転するように振り向く。

「この、餓鬼が！」

瞬より背の高い使用人は、鉄パイプを振り上げる。

「ウゼエ」

その一言だけ呟いて、鳩尾を蹴り上げる。

「……っが！」

その蹴りが思った以上に強かったらしく、使用人は壁にぶつかった。

「え……何、お前？」

「早く通ってくださいよ。じゃないと、闇藤さん死んじやいますよ？」

瞬は静かに言う。

「ここなら、僕とあの、少々太ったオッサンに任せてください」

「俺のこと、太ったオッサンって言うな！」

篠原は顔だけだして言う。

「……じゃ、頼んだ！……！行こう、叫悟さん」

叫悟は小さく「おう」と答える。

瞬は蹴ったり、殴ったりしながら、襲い掛かってくる使用人を薙ぎ倒して允博と叫悟の道を作った。

「車は？」

「真木野が来てます。黒い車です」

叫悟は頷くと鉄の門を押し開けた。

「真木野、病院まで」

真木野は帽子を深く被る。

「はいよ、お客さん」

「だから、何で俺のことお客さんって言うんだよ」

真木野はにこにこ笑いながら車を走らせた。

「……これから、どうすんだか」

小さく揺れる車の中でぼそりと呟いた。

指令27..闇藤脱走編その1

「闇藤さん、大丈夫だよな」

「大丈夫だろ。急所は外してたし、弾も一発受けただけだ」

允博と叫悟は病院の待合場の椅子に座っていた。

「お前等がそんなんじゃない、いけんだろ」

真木野は煙草に火を付けながら言う。

「ここで吸うなよ。俺、煙草の煙は嫌い派の一人なんだ」

「誰だってそうに決まってるんだろ」

真木野は煙を吐きながら言う。

「だーから、あっち行って吸えよ！」

允博は煙を手で払う。

「はいはい、分かったって……」

真木野は仕方なさそうに立ち上がって、スタンド灰皿の所へ向かった。

「って言うかさ」

允博は仕切るように言う。

「どうした？允博。胃潰瘍で痛むのか？なら、診察室に行って来い」

「………叫悟さん、俺胃潰瘍とかなってないから」

「で、どしたんだよ」

真木野は煙草の灰を落とす。

「あのさ、一つ訊いていい？病院って、深夜も営業中なのか？」

その言葉に二人は溜息を吐く。

「お前、バカ？」

二人は声を揃えて言う。

「営業中ってお前……ここは、店じゃないんだけど」

允博は「へえー」と納得する。

「それに、深夜に急患入ってきたらどうすんだよ。119したのに出なかったって……。廃業するから」

「ところで、何で真木野までいんだ？」

允博は真木野の方を見て言う。

「俺の話は、無視か？ 允博」

「お客さん、困りますよオ？ 私を誰だと思ってんですか？」

「真木野紳介。まきのしんすけまたの名を——……。何だっけ？」

叫悟と真木野は地面に滑り抜ける。

「昔の漫画みたいだな」

允博はケラケラ笑いながら言う。

「俺は紳介じゃねえ！ 桂だ！けいそれに、またの名をつて、これ以外の名前持たないから！！！」

真木野は地面に落ちた煙草を拾う。

「なあ、もう闇藤さんところ行けるんじゃないか？」

允博は叫悟に言う。

「そうだな。そろそろいいだろう。多分、あの人なら、そう簡単には死なないと思うしな」

叫悟は腕組みしながら言う。

「お前等二人は、闇藤さんのことをどう思ってんだ？ サイボーグか何かですか？」

「人間以外の生物？」

允博は真剣な顔をしてそう言った。

「お前、マジでバカだろ」

真木野は煙草のケースを仕舞いながら小さく呟いた。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

「……にしてもお前、凄^{すげ}ェ綺麗に片付けたな……」

篠原は感心した声で言う。

「そりゃ、僕は始末屋ですから」

瞬は静かに言う。

「でもよオ……これだけの人間をどうやって……」

篠原と瞬の目の前には、結構な人数の使用人が倒れていた。

「簡単です。一度の攻撃で二～三人倒せばいいんです」

「イヤ、それ簡単じゃないから」

「この人は全員頭が悪い。一気に来ますか？ 普通」

篠原は「え？」と訊き返す。

「え？ じゃありません。普通は何人かで詰め寄ってきますか？ って訊いてるんですよ」

「それ、普通じゃないのか？」

「真正面から来ますか？ 後ろも、取らないといけないでしょう？」

篠原はアタツシケースを床に置く。

「なあ、一つ言っただいいいか？」

瞬は「どうぞ」と言う。

「俺、そんな経験ないから、知らないんだけど」

「只単にあなたが逃げていただけなんじゃないですか？」

「活躍したのは今日が初めてだったな」

瞬は鼻で笑う。

「今、鼻で笑ったろ……！」

「笑ってません。僕は口でフツと言ったんです」

初対面にも関わらず、二人はいつの間にか仲良くなっていた。

その時、篠原の携帯が鳴った。

「うお、允博からだ」

ディスプレイの表示を見た後、通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『闇藤さんが……！！！！』

允博の声だった。

「どうした、允博？ ってか、闇藤さんがどうした？」

瞬は篠原の携帯を奪う。

「デメエ……！」

「何があったんですか？」

『闇藤さんが、病院抜け出した……！』

瞬は暫く黙る。

「……病院を抜け出した？ 闇藤さんが？」

瞬は訊いたこと允博に訊き返した。

「何で監視がついてなかったんですか？ 貴方方、三人は何をしていたんですか！？」

自分より年下の人に三人は怒鳴られていた。

「今いる病院はどこですか？」

『みなみほらい南原井病院だ』

「分かりました、今から行きます。皆さんはそこで待機してください」

瞬は通話を切ると、篠原の方を向いた。

「オッサン！」

「オッサン言うなや、ボケエ！」

瞬は携帯を篠原に返す。

「これから、南原井病院に行きます。早くしてください」

「何で病院に行くんだ？」

「あんた……話聞いてなかったんですか……？」

篠原は「おう」と答える。

「お前は、アホかああああああああ……！」

アップパーを喰らわせたあと、瞬は階段を駆け下りた。

「ちょっと、待て！」

顎を摩りながら篠原はアタッシュケースを手にして、瞬の後を追った。

指令28..闇藤脱走編その2

「畜生、どこ行きやがったんだよあの人はぁ!!!!」

允博は闇藤のいた病室で叫んだ。

「……にしても、この置手紙らしき物の字……。ものすごく汚いんだけど……」

真木野は枕のところに置かれていた白いメモ用紙を手にとって呟いた。

「確かに……。闇藤さんとは思えない程……。汚い」

叫悟は腕を組んで言った。

三人が今見ている手紙の字は、小学校一、二年の男子が書く様な字だった。

「………何て書いてあるか読めるか？」

「ええとなぁ……。『俺をこんな病院に連れてくるなんぞ、テメー等、爪が甘いんだよ。ボーケ! つつうことで、俺は病院を抜ける。あばよ』だってさ」

「あばよって……。古。それに、小学生の書く文だな……」

真木野は言う。

「ってかさ、爪が甘いって、何が言いたんだこの人？」

允博と叫悟は首を傾げる。

「さぁ、知らな……」

「おい! 闇藤さんは!？」

篠原が病室に飛び込んで来た。

「うわ、篠原さん!!!!」

篠原の後に、ゆっくりと瞬が入ってきた。

「始末屋の……」

「抹充瞬です」

瞬は静かに言う。

「で、闇藤さんは……」

「いない。どっかに消えた」

瞬は真木野が持っているメモを取る。

「汚い字ですねえ……。こんな字、初めて見ましたよ」

瞬は文を解読すると、真木野に返した。

「さて、これからどうするんですか？ 皆さんは」

「俺は帰るからな」

真木野は言った。

「え、何で？」

「允博、俺の職業を考えろ。俺はタクシードライバーだ」

「あ、そっか。じゃーな、真木野」

允博は無関心そうに言うのと、考え込んだ顔をした。

「じゃ、そう言うことで。俺は抜ける」

真木野は病室から退場した。

「さて、瞬、お前も一旦家に帰れ」

允博は瞬に言った。

「ええ？ 何で僕が家なんかに戻らないといけないんですか？ 面倒ですよ」

「じゃ、テメエは一生放浪してろ」

「それに、僕はやらないといけないことがまだあるんです」

瞬はベッドの端に腰掛けた。

「何があんだよ」

「残りの阿河家の人、阿河家に関係した人を端から潰していくんです」

「そうか、なら行け」

叫悟は瞬から目を逸らして言った。

「大丈夫だって。あなたは殺さない。闇藤さんから直接指示があったんだ。“叫悟をリストから外せ”ってね」

瞬は小さく笑みを浮かべて言った。

「そうか、だったら、今のうちに行け」

瞬は病室から出て扉を閉めた。

「……んで、結局は俺ら三人で捜せてことじゃん」
「そうだな」

允博の意見に叫悟と篠原は同意した。

「で、どこをどう捜すんだ？」

「俺に訊くな」

「闇藤さんがいつも居るとこは」

篠原は窓に向かう。

「そこはもう捜した。闇藤さんは居なかった」

「本当か？」

叫悟は疑り深い目で見る。

「ああ、瞬が言ってた」

「何それ、黒の契約者みたいじゃん」

「あ、ダーカーのインだろ」

「何の話してんの、俺ら」

篠原は話を元に戻した。

「どうすんだ？これから」

「新たに闇藤さんを作る！！！！」

「允博、お前はちよつと黙れ」

叫悟は允博に言った。

「病室^{しやう}抜けたのがちよつと前なら、そう遠くへは行^いってない筈だ」

「そうだよな、弾丸一発とは言え、闇藤さん、当たったとこ結構ヤバかったしな」

「つてか、そんなんだったら、病院居れだろ」

篠原は率直な意見を言った。

「俺もそう思った」

「さて、捜しに行こうか。早くしねえと、あの人どっかにフラツと行^いちまうからな」

三人は闇藤を見つけたら直ぐに電話をして確保すると決めて、病院を出た。

ΨΨΨΨΨΨΨΨ

「どう思う？ あいつら」

闇の中から一人の男が少年へ問い掛ける。

「いいんじゃないんですか？ 僕はあの叫悟って奴氣に入らないですが」

月の明りが当たっている所にいる少年、抹充瞬は闇に答える。

「しかし闇藤さんも勿体無いことするなあ……。あんなに心配してくれる仲間がいるのに。それを、自分から手放すなんて」

闇から男が出てくる。

「仲間じゃねえ。あいつらは俺の仲間なんかじゃないさ」

闇藤は煙草に火を付けながら言う。

「じゃあ、闇藤さんは何て思ってるんですか？ 手下？ 出来のいい部下？」

瞬は訊く。

「それとも、自分の都合に上手く動いてくれる、人形ですか？」

「まさか」

闇藤は煙を吐く。

「手下でも、出来のいい部下でもなかったら、都合よく動いてくれる人形でも何でもねえよ」

「じゃあ、何ですか？」

闇藤は瞬の隣に歩み寄る。

「瞬、あいつらと俺を同じにするなよ。俺はあっち、あいつらはこっちだ」

ジェスチャー無しで闇藤は言う。

「闇藤さん、その喩えは……あの世とこの世ですか？」

「何でそうなんだよ。何であの世とこの世なんだよ。色で言えば、俺は黒、あいつ等は白って事だ」

「白と黒ねえ……」

瞬はフツと笑う。

「鼻で笑ったか？」

「いえ、ちよつと可笑しくて……。あいつ等、闇藤さんのこと捜してますよ」

「どこをだ？」

瞬は目を正面から逸らさずに言う。

「この辺りまで来てます」

「お前、何かダーカーのインみたいだな」

「ダーカーって何ですか？」

闇藤は煙草の灰を落とす。

「知らないのか？」

「知りません」

瞬はキツパリと答える。

「そうかよ。んじゃ、場所移動するか」

「下手に動くと連れ戻されますよ」

立ち上がる闇藤に瞬は釘を刺すように言う。

「……分かった。じゃあ瞬、先導よろしく」

瞬は立ち上がって歩き出す。

「……二十位年が離れた子供に先導してもらうなんて、大人として失格だな」

闇藤は静かに呟くと、先を歩く瞬の後を追った。

指令29…闇藤脱走編その3

「あ————！！！！！」

允博は橋の手摺に立って叫んだ。

「允博、お前何してんの？」

篠原は冷めた瞳で允博を見と言う。

「だって、搜したって闇藤さんいないじゃん！！！」

「お前は、西遊記の悟空か！？」

「俺は香取慎吾じゃねええええええええ！！！！！」

叫悟は允博の頭を叩く。

「だからって、橋の手摺に立って叫んでんじゃねえ！お前は酔っ払いか！？」

「允博、落ちるから降りろ」

「うるせー、西遊記で言えば、八戒みたいなくせに！」

「おいお前等、俺らは何してんだ？」

叫悟はボソッと呟く。

「闇藤さん捜しに」

「じゃあ、早くそこから降りろ」

允博は飛び降りて地面に着地する。

「最後に“筋斗雲————！！！！”って叫んでみたかった」
「黙れ酔っ払いが」

ⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢ

「どうしたんですか？お客さん」

真木野は携帯の通話ボタンを押した。

「允博、どうしたんだ？」

『闇藤さん見てないか！？』

「見てない見てない。俺に訊くな」

『うるせえ！本当に見てないんだな！？』

「しつこいので切る」

真木野は半強制的に通話を切った。

「……これでよかったんですよね？闇藤さん」

後ろの座席には、腕を組んだ闇藤と無表情でいる瞬が座っていた。

「どこまで行くんですか？」

「さあ、どこに行こうか」

真木野は困ったような顔をする。

「行き先を告げてもらわないと、困りますよ闇藤さん」

「じゃあ、僕の家まで」

瞬は真木野に言う。

「それじゃあ、先導よろしくお願いします」

瞬は嫌そうな顔をした後にフツと小さく笑った。

山山山山山山山山

「真木野も見えてないってさ」

「じゃ、瞬に訊けばいいじゃん」

「あいつ携帯持ってたのか？」

叫悟は篠原に訊く。

「知らん」

「ほらみろ、お前も知らないんじゃないか」

篠原は橋の下に広がる川を見る。

「闇藤さんが……」

「闇藤さんがどうしたんだ？」

「あの人が俺を誘わなかったらどうしてたんだろうな——って」
篠原の言葉で、二人は下を向く。

「え、何この雰囲気!？」

「確かに、俺も思ったことある」

允博は橋に凭れながら言う。

「そりゃ、俺もだ」

叫悟も言う。

「あーあ、完全に抜けたら、俺らどうなんだろうな」

「知らん。繋がりが完全に切れるのは当たり前だ」

「……俺、ここの空気に合わないんだけど」

篠原は地面に座り込む。

「何? このしみじみした雰囲気嫌いだって? お前の都合なんか知らねえよ」

允博は顔を道路の方へ向けた。

「あ」

目の前で、一台の車が通った。

運転手は、真木野。

「てめ、真木野待てコラアアアアアアアアアアア!!!」

允博は走り出した。

「允博!?! お前、バカか!?!」

「バカの篠原に言われたかねえ!?!!!」

「おい、允博。コイツはバカじゃねえ。メタボリックだ」
篠原はツツコミを入れる気力も無かった。

「おい、真木野! バカの真木野!」

その時、助手席の窓が開いた。

「おいおいおい、バカのお前が俺をバカ扱いすんな」
そう言って窓を閉めた。

「言いたい事はそれだけかよ!!!」

允博は足を止めた。

そうしている内に車はどんどん離れていく。

允博の視界から車が消えた後、誰かがこちらに歩いていた。

「…………あれ、闇藤さん？」

「よ」

闇藤は手を上げて挨拶をした。

「…………『よ』じゃねえよ、アンタ何してんだ!? バツカじゃねーの!? アホじゃねーの!?」

允博は叫んだ。

「いやあ、病院のあの不味い飯を食うのかと思ったら…………いつの間にか」

「アホか、お前は——!!!」

闇藤は煙草の灰を指で弾いて落とす。

「で、今回ここに來たのには訳がある」

「何ですか、訳って」

允博の後ろから叫悟と篠原が走ってきた。

「闇藤さん!？」

「バツカな闇藤さん、どうしたんですか？」

闇藤は顔に微かに怒りを表した。

「…………じゃ、用件を言おう。ちゃんと聞けよ。一回しか言わねえ」

叫悟は微かに目を細めた。

「まさか」

叫悟はその言葉だけを呟いた。

「叫悟、お前の予想は多分当ってる」

「ちよっと、何言い出すんだよ。まだ何もしてねえってのに!」

闇藤と叫悟は二人で訳の分からないことを言い出した。

「待てよ、アンタら二人、何話してんだよ」

四人の間に何分間か沈黙が訪れる。

「何なんだよ、早く言ってくれって篠原の髪がロン毛になっちゃう

「だろ!!!」

「允博、今はそんなこと言ってられないってことは分かってるだろ」
珍しく篠原が言った。

「……………闇藤さん、何ですか？その訳って」

闇藤は煙草を落とすと、允博と篠原と叫悟のに背を向けた。

「もうちょつといい場所で言いたかったんだけどなあ……………まあ、仕方ないか。いやあ、一年と約一ヶ月、面白かったなあ、秋山と阿河潰せたし……………」

闇藤は一人で三人に聞こえるように呟きだした。

「待って、闇藤さん。なあ、アンタ何言ってるんだよ」

允博はやっと分かったように言い出す。

「允博、お前が命名した殺し屋同盟・解散組みは、今日を持って解散を言い渡す」

闇藤は振り向かずになんて言った。

最終指令…解散命令

「え……何、何て言ったんだよ、今」

允博は頭が真っ白になったような顔をして呟いた。

「ちょっと、待て！何言ってるのアンタ！？ふざけんじゃねえよ！後約一年続けろって言ったの、アンタじゃねえか！」

闇藤はゆっくりと歩き出す。

「允博、俺の状況が変わったんだ」

「アンタの都合なんか知らねえよ……！」

允博は闇藤を睨みつける。

「悪いな、俺の私事に付き合わせて。じゃあな」

闇藤は手を小さく上げると歩いて行った。

「待てよ、バカ野郎が」

允博はその場で動けずに居た。

ΨΨΨΨΨΨΨΨ

「よかったんですか？あんな言い方で。允博、半泣きでしたよ？」

真木野は卑しい笑い顔で言う。

「黙れよ」

闇藤は煙草に火を付けながらドアを閉める。

「いいんだよ、あれで。アイツ等はこれ以上こっちの世界に関わっちゃいけねえよ。普通に戻れなくなるしな」

闇藤は窓の向こうを眺めて呟いた。

「でも、あの言い方はキツイと思いますよ」

闇藤の隣で瞬が呟く。

「何で」

「可哀想ですよ、小丘さんが」

瞬はフツと小さく笑う。

「全然そう思わないな」

「またまたァ、実はキツ過ぎたって思ってるんでしょう？」

瞬は馬鹿にするような口調で言う。

「うっせえ。おいマッキー、車出せ」

「何ですか？そのマッキーってのは」

「お前のアダ名だ。在り難く受け取れ」

車を出す直前に、真木野は「餓鬼」と呟いた。

ΨΨΨΨΨΨΨΨ

「おい、允博。落ち着いたか？」

篠原の家に、允博はいた。

「ってか、家隣なんだから帰れって！」

「うるせえ、俺の今の気分も知らん奴は去れ！消えろ！失せやがれ
！！！！」

「ここ、俺の家……」

篠原はボソッと呟いた。

「ま、允博。これは仕方がない現実だ」

篠原の後ろで叫悟が言う。

「これが現実だぁ！？俺は現実なんてものは知らねえよ！」

允博は立ち上がる。

「何だよ、アンタは自分の親が目の前で死んだって言うのに、これ

は仕方がない現実だって済ませんのか？」

「俺は済ませたな」

叫悟は平然とした表情で言う。

「叫悟さん……、アンタ最悪だな」

「最悪ってのは、最も悪いってことだぞ」

叫悟は篠原の家の中を歩き回る。

「……………ここも、居辛くなったな」

「え？」

允博の言葉に篠原は訊き返す。

「俺、実家に帰る」

「はぁ！？」

允博は玄関へ向かった。

「え、ちよつと待てよ。何？お前は実家に帰る？解散するって言う理由でか！？」

「ああ、そうだよ」

「お前、馬鹿だな」

篠原は呟く。

「俺はどうせ馬鹿さ。何事も受け入れられない、どうしようもない馬鹿だよ」

允博はドアを開けて篠原の家から去った。

「ちよつと、おい。叫悟さん……。アンタの所為だぞ！！！」

篠原は振り向いた。

が、そこには誰も居なかった。

「あれエエエエエエエエエエエエ！！！！？」

ベランダも窓も開いていない、密室状態の中での消滅だった（？）。

μμμμμμμμ

「アイツ、絶対馬鹿だ……アイツが振り向くまでに風呂場の入り口に隠れてたとか……。気付けよ」

叫悟はマンションがら出た。

出た途端に、携帯が鳴った。

「メールかよ。誰だ……」

メールの本文を見た瞬間に、叫悟の表情は固まった。

「阿河の人間が……もう死んだだと？」

叫悟は携帯を閉じた。

「そうか、俺意外全員が……」

叫悟は小さく、クククと笑うとタクシーを拾った。

μμμμμμμμ

「さて、この家はどうするか」

允博は荷物を纏めていた。

「引越し……にしては結構お手軽だな」

允博の言うとおり、引越しにはお手軽な方だ。

荷物はそんなに多くないし、家具だってちよつとあるだけ。

「親父に何て言い訳しようかなあ……」

允博は携帯をポケットから出す。

画面には、“新着メール”の表示が出た。

「……。閻藤さんからって。ふざけんなよ。もうメアドとかは消した筈だ」

允博はメールを開いた。

「……空メールかよ。ウツゼエ奴だな」

允博は実家の電話番号を押した。

「あ、もしもし？」

允博はその日、家から去った。

⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘⌘

「允博、本当に行ったぞ」

篠原は呟いた。

『そうかよ』

「そうかよって、アンタがあんな風に言ったからですよ？」

電話をしていた。

『べつつに、俺の所為じゃねーし。勝手にショック受けた允博が悪
いってんだよ』

「あんたは、邪道か」

篠原は携帯を持ち直す。

「いいんですか？あのままです。あいつ、銃持ってたまんまですよ？」

『大丈夫だろ。アイツは俺を殺さない』

「闇藤さん、死んでも知りませんからね。死んだらもう、何も言えませんよ、何も伝えられませんよ。自分が餓鬼だったってことも言えませんよ」

『允博はもう承知済みだ』

闇藤は言う。

『大体、普通に戻れなくなるってほざいたのは、どこのどいつだ？』

允博だろうがよ』

「他人事っすね……」

『いいんだよ、そのことは。次はもう解散なんか言わねえと思うしな』

闇藤は懐かしむように言う。

「え、次って何ですか？しかも思うしって……闇藤さん？」
そこで通話は切れた。

「……どう言うことだよ」

ⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢ

「やあ、お客さん。どうしたんですか？その荷物。家出ですか？」

真木野は乗り込んで来た乗客に言った。

「家出じゃねえ、お客さんって呼ぶな」

「じゃあ、允博」

タクシーに乗ったのは、允博だった。

「どこ行くんだ？」

「実家まで」

「金掛かるよ」

「んなこたあ、承知済みだ！」

真木野は仕方ないと言いた気な顔をして車を出した。

「これで允博とも、お別れか、悲しいねえ」

「俺は清々するわ」

真木野の顔から笑みが消える。

「解散しろって言われたんだろ？」

允博は首肯する。

「可哀想に、俺の仲間に入れてやろうか？」

「入れんでいい」

「そう言えば、あの、元阿河くん、何かするらしいよ」

允博は携帯を弄る。

「何かって何だ？」

「…………。じゃあ、教えてやろう。元阿河くん、殺し屋同盟みたいなやるらしいよ」

「は」

車は停車する。

「楽しみだねえ、ニュースが」

「待てよ、何でお前が知ってんだよ」

「俺を誰か知ってて言ってるのか？俺は推測者だぞ。推測とは言えど、俺のは殆ど予言だ」

允博は携帯を仕舞う。

「そうかよ。お前の推測は当るからな。信じとくよ」

允博は内ポケットから煙草のケースを取り出す。

「あれ、お前煙草吸ってたのか？」

「まっさか、初めて吸うんだよ」

火を付けて、煙を吐き出す。

「さて、俺はどうしようかな……」

真木野は黙って前を見据えていた。

ΨΨΨΨΨΨΨ

「さあて、どうしようかなあ…………。叫悟、俺はお前を俺と同じ名前を名乗らせたくないんだがなあ…………。」

「いいですよ、別に。俺はもう闇藤ってアンタの目の前で名乗ったんですから」

叫悟はニヤリと笑っていた。

「メンバーは三人か？」

「十二人です」

「五人か……」

闇藤はスタンド灰皿に煙草を押し付ける。

「じゃ、頑張れよ。叫悟」

「俺は、闇藤叫悟ですが」

闇藤はフツと小さく笑うと、階段を降りて行った。

あれから約一年半の月日が流れていた。

允博は未だに手に職を付けていない。

「くっそー、怠いんだよ仕事が」

求人情報誌を顔に載せて允博は呟く。

「無いんだよね、いい仕事が」

テレビのリモコンを手にして、スイッチを押した。

『……次のニュースです。本日未明、テレビでも有名な、山本昭氏^{やまもとあきら}の家に、何者かが侵入した形跡が残っていました。山本氏は寝室のベットの上で、額を銃で撃たれ……』

「まった、バツカバかしい……」

允博は寝転んだまま呟く。

『恐いですよねえ、最近大富豪の人が狙われていますよねえ……』
その言葉で允博は起き上がる。

「は？今、何て言ったんだよ……。大富豪とかが狙われてる……？」
二年半前のニュースでも、あの言葉を聞いたことがあった。

「え、ちょっと待てよ。それじゃあ、俺等が殺し屋やってた時と同じじゃん……」

允博はあの日真木野が呟いた言葉を思い出した。

『元阿河くんが……』

「え……、叫悟さんが？」

允博は引き攣る顔で呟いた。

「嘘だろ……。これじゃあ、連鎖じゃねえか。輪廻みたいじゃねえか」

允博はテレビの電源を切った。

最終指令：解散命令（後書き）

これで、殺し屋同盟・解散組みは終了です。

変な終わり方ですが、結局はズーッとこんなのが続くという話です。最終話はいつか修正するかもしれません。

いつかは自分でも分かりませんが、一応修正するつもりです。

ここまで読んでくださった方々、感謝しています。

感謝しても言葉が足りないくらい感謝しています。

こんな未熟な小説を読んでくださって本当に有り難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3245c/>

殺し屋同盟・解散組み

2010年10月28日01時11分発行